
Fate/stay night • Undersea Tsukinowa

雷雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/stay night・Undersa Tsuk
inowa

【Nコード】

N33660

【作者名】

雷雨

【あらすじ】

月面での聖杯戦争を終えた、少女は眠りについた・・・しかし、運命の歯車によって、少女は《彼女》の過去に舞い戻り 再び真紅のサーヴァントの少女と共に聖杯戦争の舞台に上がる。

ご感想をいただいた際、返信がおおいに遅れる場合があります、ご了承ください。

キャラ設定（更新日03/14）（前書き）

第十一話からの設定です。

03/14：セイバー（赤）設定 追加。

キャラ設定（更新日03/14）

衛宮 えみや
白兔 しろう

CV：中原麻衣

身長：160cm

体重：48kg

スリーサイズ：83/56/79

イメージカラー：青（海）

特技：家事全般、格闘技、アクセサリ作り（主に銀細工）

好きなもの：家族、海、天体観測、洗濯、読書、怪談、うた、焼きそばパン、桜の手料理

苦手なもの：衛宮士郎

天敵：自分の幸福を妨害するモノ。

ムーンセルの時よりかは、自己もあり表情豊かでマイペース、時に男らしく腹黒い一面もある。

可愛いものに目がなく痴女的なことも若干ある。（本人自覚なし）

桜とは親友同士で士郎に好意を寄せる桜を密かに応援してる。

自分の大切な人を守りたいと思っている為、自分の心が傷付こうが構わないと歪んだところがある。

左の二の腕と脇腹に火傷の跡あり。

学校は桜と同じクラスで弓道部に入っている。

学校では密かにモテているが、本人自覚ない。

主な戦闘は体術、銃器。

魔術は治癒と強化など防御のみ習得したが相手に強化をかけるなど高度な魔術を簡単にしてしまう異例の力を持つ。

攻撃的な魔術は不得意で体術や銃器でカバー。

銃器は服のどこかに忍ばせて持ち歩いている、他にも手榴弾や閃光弾を隠し持っている。

ムーンセルの能力もだいたい使いこなせるが、限度を超えると脳震盪を起こす。

また、白兔も宝具を作り出せるが、土郎の「投影」とは違い白兔はムーンセルにある記録から宝具を具現化する、「再構築」を使う。

属性：水、風

ムーンセル開放時：水、風、電子（雷？）、盾

●イメージ（花 & amp ; 宝石）：

・彼岸花（花言葉の「独立、あきらめ、悲しい思い出」、ではなく「再会、想うはあなた一人、また会う日を楽しみに」の方）　　リ
コリス：希の神話では海の女神の名でもある。

・ルピナス（花言葉：母性愛、あなたは私の心にやすらぎを与える）

ムーンストーン

・月長石：名前のまんまです。（笑）

・ターコイズ：危険から身を守る。

ムーンセルの能力

●エネミー：使い魔

●治癒：満身創痍を完治（赤原礼装の応用の様なの）

●宝具再構築：本物と同等に造れるが、ランクが高いほど負担が倍増する。

他未定：

●服装

白のハイネックに薄地のターコイズブルー色のチエニックに月の刺繍がされており、右脇の裾には絞り紐があり少し裾が上がりがち、カフェオレ色の膝上のスカート。

●サーヴァント：セイバー（赤）

ムーンセルでの白兔設定

月護 白兔（つきもり しろう）

無感情無口で寡黙な少女。

だが、内心では無茶苦茶毒舌言ってます。

何を考えているかわからないが、苛立つと足蹴りを食らわす。

口調は通常語に男口調まじり。

脚が早い。

焼きそばパンが好物で一回の食事に五個は食べる。

歌が上手く、サーヴァントに好評だった。

密かにユリウスが気になっていたが、それが恋愛とは気付いていない。

セイバー（赤）

身長：154cm

体重：42kg

スリーサイズ：87/53/76

イメージカラー：真紅

好きな物：美しいもの、芸術、白兔

嫌いな物：儉約、没落、反逆、大雑把な食事、

属性：混沌・中庸

白兔のサーヴァント。

真紅のドレスを纏った大剣を操る少女剣士。

士郎のセイバー（青）とは瓜二つだが全くの別人、姉妹と例えられ
たら姉にあたる。

尊大で上から目線の態度をとるがどこか憎めない性格。

白兔ラブで白兔以外には従わないと固持している

白兔に「ルキア」と呼ばれると一瞬でデレるが、他者が呼べば「喝^グ
采は剣戟の如く」を確実に喰らう。
ラウディサヌス・ブラウセルン

白兔の嫁であり夫である。

「ルキア」とはセイバーの名が知れる前の幼名（？）である。
某腹ペコと同じように女性形です。意味は「光」

サーバント設定。(更新日02/05)(前書き)

02/05:赤セイバー

サーヴァント設定。(更新日02/05)

【クラス】セイバー

【性別】女性

【真名】ネロ・クラウディウス

【宝具】??

【武器】アエストウス・エストウス
韻鉄の韃「原初の火」

【筋力】B + 【耐久】B 【敏捷】C + 【魔力】A 【幸運】

B + 【宝具】??

【クラス別スキル】

対魔力：C (C → A +)

二工程以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法等、大がかりな魔術は防げない。

彼女自身に対魔力が皆無なため、セイバーのクラスにあるまじき低さを誇る。

ただし、白兔に強化をかけられた際はC → A + になる。

騎乗：B (B → A +)

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。ただし固有スキルの使用によつては変化する。

【保有スキル】

頭痛持ち：B

生まれつきの呪い。

精神スキルが失敗しやすい、芸術のスキルも発揮されにくい。

皇帝特権：EX

自分が持っていないスキルもセイバーが「余は持つておる！」と主張すると短期間獲得できる。

A以上だと神性やカリスマ等、肉体に寄与しない能力すら獲得できる。

いわば、反則並のチートwww

プロローグ（前書き）

主人公はEXTRAの女主です。

プロローグ

西暦2032年。

月海原学園と言う学園を舞台に、聖杯と名のあらゆる願いを叶える万能の願望機を巡り、128人の魔術師^{ウィザード}と聖杯によって召喚されしサーヴァントによる聖杯戦争（殺し合い）が始った。

やがて、戦いは終わり——一人の少女と深紅の衣装の少女のサーヴァントが勝ち残った。

そして、少女は聖杯に願った。

『トワイヌ・ピースマンという人間の情報を元に作られたNPC』
が生み出した戦争の火種を消し去る。

聖杯戦争を終え、ムーンセルの封印。

彼女をここまで支えてくれた黒髪の少女の脱出。

その後、少女は聖杯によって分解される直前に小さく呟いた。

——もう少し、いたかった。

しかし、少女の言葉^{願い}は誰にも聞かれず、少女は目を閉じた。

そして電子虚構世界… S E ・ R A ・ P Hでの聖杯戦争は終焉を向え。

——そうして、静かに舞台の演は下りた。

だが、もう一つの聖杯は時限を超え、

——静かに動き出した。

そして、新たな舞台の幕は開かれた。

プロローグ（後書き）

はじめまして、場の勢いでプロローグを書いたは良いが、まだ本編まで思い浮かべていないです、すみません。orz

更新が遅れると思いますが、頑張ってかきます。

第一話・聖杯での出会い。（前書き）

聖杯の中で、あの人に会います。

10 / 17 加筆修正

第一話・聖杯での出会い。

これで良かったんだ。

そう自身に言い聞かせながら私はゆっくり目を閉じた。

心残りは――……ない、わけがない。

ちゃんとムーンセルを封印出来たとか。

セイバーの事とか。

凜の事とか。

購買のやきそばパンもっと、食べたかったとか。

桜や藤村先生や一成らNPCはどうなるのか。

神父は……いや、あれは心配無用か…。

………大丈夫だよね。

私のやったことは間違っていないよね。

もう一度、目を開いたが風景はかわらない電子の海が広がっている。

もう、身体感覚がない……いや、もう身体は分解されて残ったのは私の意識体だけか……

身体なくても意識はあるんだー、と呑気なことを言うが、正直…虚しい。

やだなあ……今更遅いけど、まだ消えたくない。

もうちょっとだけでいいから学校生活したかった。

もっと、笑って、泣いて、怒って…

朝、起きて家族や友達に「おはよう」を言ったり。

夜、一日の終わりに「おやすみ」を言って、

友達と、遊んだり、一緒に勉強したり…

やだな。

このまま、『私』がなくなっちゃうのか……やだなあ…

——もう少し、いたかった。

なんて、ね。

誰にも届かないと分かっているながらも、私は目を閉じた。

「その願い、聞き入れた。」

………は？

聞こえるはずのない声に目を開く。

———なあっ！？

気がつけば円形の一面ステンドグラスの空間に私は居た。

———てか、ここどこっ！？なに、ムーンセルの底ですかっ！？

———つか、いまの声誰ですかっ！？

「落ち着けよ、アンタ」

！？

はっと気がつけばそこには黒い薄ぺらい人の形をしたのっぺらぼうの影が立っている。

アンビリバボー………なにこれ。

影が浮かび上がって立体的になったような黒い影さん、つかアンタ誰でこのステンドグラスの間は何だよ。

——どちらさん？あと此処は？

「ああ、オレか？オレはアンリ・マユ。でもって、ここは聖杯の中だ……と言ってもアンタの知る聖杯じゃなけどな。」

アンリ……マユ？たしか、ゾロアスター教に出て来る邪神「この世^{アン}全ての悪^{リ・マユ}」のこと？

目の前の薄っぺらいのがそうだって言うのか？

えー、なんで邪神さんがいるんですかー。

で、この間は私の知る聖杯じゃなく、別の聖杯？どーゆうことだ？

——あのさ、この聖杯は月面で発見された太陽系最古の物体『ムーンセル・オートマトン』じゃ、ないの？

アンリ・マユはおう、と答えた。

「そうだぜ、オレらの居る聖杯は冬木って町で発見された聖杯だ、だからそのー、…ムーンセルってのとは同じ聖杯でも別物だ。」

え、じゃあ、私が封印した聖杯以外にもあるってこと…？

そう、なんだ……んっ？なんで私、そもそも別の聖杯の中に居んの？

——ちよっと、待って。じゃ、なんで私がここに居るの？

「そりゃ、オレがアンタの願いを叶える為に呼んだから」

——ああ、ナルホド………ちよい待て、私の願い？叶え

るって、私の願いはムーンセルにいられたはずだが…？

「それとは違う、オレが言っているのはアンタ『自身』の願い」

——私、自身の願い？

「もう少し、いたって言ったじゃねえか」

……あ、そう言えば、言っただけそんなこと…、なんて他人事のように言えばアンリ・マユはおいしい、と肩を竦める。

——でもさ、出来るのか？

「それでも、オレは聖杯の端くれなんだぜ？アンタの願いを叶えるくらいたやすい。」

へー、凄ーい。

あ、でも無理っしょ……私、身体が無いし。

それに、アンリ・マユって邪神で……あれ、でもなんでもそもアンリ・マユが聖杯の中に？

——あのさ、話は変わるけど…なんで、アンタは聖杯の中に居るの？

「ああ、そついやこつちの聖杯の事とか、話してなかったな……つまんねえ話だが聞くか？」

え、何、この展開

まあ、断る理由もないし……と、答えればアンリ・マユは話始めた。

話終えた時、身体があつたら私は泣いていただろうかそれとも怒っているだろうか。

始めにアンリ・マユ……彼は自身の事を話した。

彼はただのどこにでも居る青年だった。

ただ、なにもない平穏な日々を過ごして老いて行く筈だった…

しかし、突然の憎悪や嫌悪、蔑みの目をされ。

舌を抜かれ。

片目を潰され。

手足の指を切断され。

最後の指を切り落としたのは父親だと彼は平然と言った。

そして、名前を奪われ『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』は生まれた。

そして、聖杯の話に移った……

聖杯戦争は過去に四回行われ。彼はその内の三回目に喚ばれた……しかし、彼は私のサーヴァントと違い、ただの人間……当然ながら

彼は、瞬殺された。

そして、彼は聖杯に注がれる魔力になった。

だが、それが彼が聖杯に居る理由だったであり、原因でもある。

聖杯が溜め込む『無色の力』は『この世全ての悪』に汚染され聖杯の願望機は破壊という形しか機能しなくなった。

だが、それを知らずに四回目が行われた。

そして、二組のマスターとサーヴァントが生き残り、その一組が聖杯を破壊した。

そして、中に入っていた魔力が外に出て辺り一面を火の海に変えた。

そして、彼の話は終わった。

今、身体が無いことがこんなに悔しいと思わなかった。

身体があつたら私は目の前の彼に抱擁した、意味はなく、ただ……ギョツと抱き締めていただろう。

「辛かったでしょ」「ごめんなさい」

色んな言葉が浮かんだが、彼…アンリ・マユはそんな言葉など欲しくはないだろう。

私が押し黙ってしまい、アンリ・マユがどしたー、と覗き込むように腰を屈めていたが、後ろに下がってなんにもないと言う。

アンリ・マユはふーん、と言って話を切り出した。

「で、だ…アンタの身体はオレが聖杯の力でなんとかしてやるよ」

—— え、あ、……ありがとう。

「どーいたしまして、オレやさしいだろ」

—— そうだね、とても『この世全ての悪』とは思えないよ、アンタ。

「うつせえ、そうゆうアンタただもんじゃねえだろ？…恐ろしく怖いもん持っているし」

—— はっ？怖いもの？どんなんだよ…

「よくわかんねえが、アンタとこの聖杯、えーっと、…ムーンセルってやつのが宿っている、みたいだ」

—— …… はっ？ちょい待て、ムーンセルの力？…もしかして、私とムーンセル聖杯が繋がっているってこと？

「まあ、似たようなもんじゃねえか？今の形が無いアンタがここまであつたのもそのおかげじゃねえか？」

化け物がアンタ、なんてアンリ・マユが言っている端に私は混乱していた。

—— じゃ、なに？私が、セラフとリンクしてエネミーを出現させたり、大魔術で空間を一時的に空間情報を書き換えるとかできんのっ！？

「……せらふとかえねみーって何かしらねえけど、やろつと思えば出来んじゃねえ？」

——なにそれっ！？それって間違いなくチートの領域じゃんか！私制御できるの！？もしかしたら廃人っ！？

「詳しくはわかんけど、なに一種の魔術ってことでよくねえ？」

——よくねえーよっ！一種の魔術だけじゃ、わかんねえってっ！おい、何笑ってんだよ！……はあ、もういいや。貰えるもんは貰った方がいいし、制御は…なんとかなるっしょ。

「もういいのか？」

——あ、…うん、大丈夫。色々ありがとう。

アンリ・マユはすつと腕伸ばしある方を指差した。

その先には、一点の光が

「あれを目指せば、入り口に行けるだろう」

——…そう、か。

私はその光にゆっくり進むが、立ち止まり振り返った。

——アンタはずっとここに居るの？

「ああ、オレはここでしか居られないからな」

そう、と答えてもう一度、アンリ・マユを見る。

——一緒に、行かない？

不意打ちの意外な一言にアンリ・マユははい？と何とも間拔けな声を零すが、アンリ・マユは首を振る。

「馬鹿なことやってんじゃねえーの、ささっと行け。」

しっしっ、と手を振るアンリ・マユ。

——……そっか、わかった。もう行くよ。

「はいはい…じゃあな、アンタに幸あれ」

——はあ？……なんだよ幸あれって！アンタ悪だろうが！悪が幸つてなんだよ！

確かに、と二人で笑い合い。またね、と別れを告げた。

「さよなら」は言わない、また会える気がしたから。

再びゆっくりと進んでいく、もう振り向きはしない。

私の視界は光の渦に吞まれ、暗転した。

第一話・聖杯での出会い。（後書き）

あれ、アンリってこんなだったけ…？

私が書くとアンリがアンリじゃなくなってしまうのはなぜ…？

一話目を読んでいただきありがとうございます。

こつしたらどうだ、とご指導頂けると嬉しいです。

第二話・灼熱の中で（前書き）

あの災害に直面します。

そして、あの二人と出会います。

第二話・灼熱の中で

あのステンドグラスの間から抜けた私は、突然の浮遊感に教われた。気がつくと、私は倒れていた、痛む身体を起こし頭を上げると、私は息を飲む。

そこは、正に灼熱の地獄。

それは、かつて《彼女》の見た、……私が知る光景だった。

肌に感じる熱風、聞こえてくる悲鳴や叫び、生き物が焼ける匂い、視界を占める人だった人達の焼け焦げて黒く炭化した姿。

「う、ぐうつ……」

急激な嘔吐に、胃の中のを吐き出す。

時折、咳をすると口の中に鉄の味がした。

—— ああ、《彼女》はこの光景の中で深い傷を負ったのか。

一定に吐いた後、私はゆっくりと上を仰いだ。
見えたのは真っ黒な太陽……

と、突然ガチツ、と頭に響く音と共に流れてくる『何か』に激しい頭痛が襲い頭を抱えて丸くなる。

「ぎつ、あ、ああ、ああああああっ!!」

地面をのたうち回り、焦点の合わない瞳は赤い空を仰ぐ。
なんだ、これは…?

それは、一人の少女の記憶と無数の情報、それらが私の頭に入ってくる。

頭の中はノイズだらけ。

——痛い、苦しい、助けて。

「あ、……ああ、………」

知らずに涙する、私は入ってくる記憶と情報の渦に耐えるしかなかった。

——あつい、あつ、いよお……と、さん……かあ……ん。

「——っ!」

最後に入ってきたのは、少女の苦痛の声、力尽き膝をついた瞬間……、記憶は途切れた。

「あ、……はっ、はっ……あ、」

息を整えて、立ち上がる。

「はっ——……はっ——……」

まだ頭痛が酷い、視界が歪んで見える……

ゆっくり腕を動かし、掌を見る、小さな手だ……まだ十にもならない子供の身体に、私は『憑衣』している。

この身体は、仮死状態だったのだろうか、動きが鈍い気がする。

何故？彼は聖杯で身体を作ったのではないのか？……いや、彼は

『この世全ての悪』だ……そう都合よくしてくれるわけがない。

それか、この少女と『私』に何かしらの繋がりがあったのか？

とにかく、理由はわからないがジツとしてはいけない。

一歩身体を動かせばそこら中痛み、顔をしかめる、それに全身が焼け付くように熱い……。

必死に振える膝を動かし前へ進む。

炎と煙が充満した視界、苦痛や、悲鳴が耳にこびりつく。

気が狂いそうだ。

私は時折転びながら前へ、前へ進む……少しでも、全てを焼き焦がす灼熱の炎の無いところに……

もう、そこいらの黒くなつた死体に何も感じなくなった。

ふらつく足元、不意に躓いてコケる。

「いたい、……っ……くっ……」

精神年齢も幼くなつたのか、ボロボロと涙を流す。

馬鹿か……泣いている場合じゃないよ……

手の甲に落ちる雫、ポツポツと濡らす、こんなところで泣いててもどうなる訳じゃない、早く……進まないと……

と、頭に何かが降つてた、空を見上げるとサッーと雨が降ってきた。雨が降ってきた事で炎上していた炎は降り注ぐ雨が熱を沈め鎮火してゆく。

恵みの雨、だ。

これで炎は鎮まる、少し落ち着きを取り戻し、身体を起こす

「あ、……」

前方に動いている人影を発見した。

生きてる人がいる、そう確認した途端、その人は倒れてしまった。私は咄嗟に駆け寄ろうとしたが、もう立つ事も出来なく胸を強打した、咳き込み口端も切ったのか鉄の味もした、仕方なく膝を突いて瓦礫の上を進む。

やっとの思いで辿り着く、そこで倒れていたのは赤毛の髪をした少年だ。

この身体とさほど変わらない歳だろう。

「……っ。」

安堵したのか、身体から力が抜け、涙が再び込み上げる。生きてる、よかった。

雨に混じって流れ落ちる涙を下の方から拭う温かな温度に閉じていた目を開く。

「……ない、てる……の？」

掠れた小さな声で、少年は私の涙を拭いている。

その手に自分の手を重ね精一杯に笑って見せた。

私のよりは多少大きいが、小さな手だ……

よかった、と微笑む顔に私は目を見開いた。

こんなにも、衰弱しているのに他人の心配をする少年。

死にそうなのに、こんなにもボロボロなのに、何故っ？

なんでこの子は、聖人みたいに笑っていられるの？

感傷に浸っていたが、私は表情を変えた。
浅い息になってゆく少年。

このままだと、死んでしまう…！

何とかしないと……いつ来るか判らない助けを待つより、私に出来る事があるはずだ……

そうだ、彼が言っていたはずだ、私と聖杯^{ムーンセル}は繋がっている、と、なら出来るか判らないけど……やるしかない。

死なせたくない、私が助けないと…！

ゆっくり深呼吸をし、手を前に広げ目を閉じる。

コネクション・オン
——接続開始

イメージするは、礼装の一つ「鳳凰のマフラー」

効果は低いが今の私の身体や体力ではこれが精一杯だ。

「（頼む、きいてっ！）」

バチツと頭に電流が流れると掌から光が発する。

成功だっ！と歓喜したが激しい頭痛に顔をしかめる、身体が悲鳴を上げる。

光も霧化かかっている。

やはり無理なのか…？違う、私はこの子を助けるっ！

少年の身体を抱きしめ、痛みに耐える

少しでもこの命を守る為に…！

必死に走った。

生存者が居ないかとかむしやらに走る。

辺りを見回してもあるのは崩れた建物に黒焦げた人だったものの、それでも必死に走り回った。

「——っ！」

何処からか微かな魔力を感じ、そっちに駆け出した。

「……………っ」

そして、見つけた。

子供が二人、安堵したが同時に緊迫した空気が漂った。

グツタリしている子供を抱き締めている子供の内の一人から感じる魔力。

近付くとギロツと睨まれた。

頭から血を流し、海のような不思議な色をした瞳は警戒の色が見え、ギユツと子供を守る様に抱き締める姿は、我が子を守る母親を連想させる。

「…………その子を見せてくれ、助けられるかもしれないから…………僕を、信用してくれないか？」

ゆっくりと手を差し延べると、子供はジツとこちらを睨んでいたが、若干警戒心が薄れている、やがて口を開いた。

たすけてくれるか？

声は無いが口で形作る、ああ、と頷くと子供の瞳から警戒が消え…
瞳から青さが消えるとこの子をたすけて、と掠れた声で呟くと身体から力が抜け崩れたところを抱き留めた。
子供は気を失っている、魔力は感じない。

「………生きている」

喜びで涙があふれてきたが、もう一人の方に異常が起きた息が浅くなっている。

死んでしまふ、そう思い胸に手を当てると、その手に黄金色に輝く光を放つ何かが現れる。

第二話・灼熱の中で（後書き）

と言うことで、少しだけムーンセルの力を出してみました。

さて、どうでしょうか。

大体の展開は出来ているんですが…まだ、女主の名前 決めてない。

O r z

私のデータでは「白^{しろ}鬼^{おに}」と記入したんですが、士郎君と被るのでどうしようか悩んでいます。

はやく、赤セイバーに会いたい。

第三話・病室での再会（前書き）

やっと、病院の書けた！。

疲れた。

第三話・病室での再会

目を覚ますと、まず視界にはいったのは白い天井。ここは何処だろう？

首を動かすと頬に柔らかい感触、枕だ。

どうやら、私はベッドに横になっている。

消毒液の匂いからしてここは病院だろう。

あの恵みの雨の後、私は一人の生存者の少年を生かす為に魔力を使い、反動が激しい痛みに襲われ……その後、どうなった？

確か、男が現れて……あ、そうだ。

くたびれたスーツにコートを羽織った男が駆け付けてきて、でも、その男から微弱な魔力を感じ警戒したが、男が少年を助けてくれる事を確認した後、力が抜け崩れるとこを男に支えられた。

気絶する直前、男の目に後悔、絶望、希望が宿っていた、そして何より、まるで自身が救われたような顔をしていた。

身体を起こすと、あっちこち痛む……それでも、なんとか座る体勢になる。

そういえば、あの少年はどうなったんだ？

辺りを見回すと横のベッドでボツとしていた。

まるで生気が抜けた人形みたいだ。

ベッドから抜けだし、少年に近づく。

さて、どうしよう……

肩を叩いたらいいか？

声をかけるにしろ、おい、は流石にマズい、女の子らしくねえ、がいいか。

参った、月海原学園に居たころは気を引き締めるために男口調を使

つていた為かそれがすっかり板についてしまった。

「ねえ、」

さて、どうしよう。

あの場所であ会っているから初対面というわけでもないし……

「あの……」

いや、まずは、はじめましてだろ、基本は。

でも、心ここに在らずだし、スルーなれるかも……それはやだなあ……無視されるの結局傷つく。

「……………どうしよう。」

「なにが？」

「！？」

え、こつち見てるしっ！？いつからっ……！？

「えっと、はじめまして……？」

「え、……………はじめまして……？」

ちよい、なぜお前まで首傾げる……可愛い。
てっ、違っっ！

女の子ならまだマシだが、この子は男だ、数年すればマツチヨになる奴を可愛いって……………

何、これってムーンセルの影響か？それとも我がサーヴァントの影

響か……

どちらにせよ、会話が先だ。

「私の事、わかる？」

「うん、たすけてくれたんだよね。」

「うん……大人の人が来るまでだけど……んっ？」

ふつと一瞬、少年の胸に黄金色の何かが見えた。

ほんの一瞬だったが、魅入られた。

なんだ……？よくわからないけど……なんか、凄く綺麗だった。
はつと気がつく少年が不思議そうにこっちを見ている。

「だいじょーぶ？」

「うん、ごめん……考えごとしてた……」

苦笑気味に答え、暫く話している内にわかった事。

この子は、記憶がない……この子供は記憶を全て失っている。
自分の事、家族の事、友達の時、全て白紙になっている。

「それじゃ、私と会うまでの全部？」

「うん……わかんない……気がついたらあの中を歩いていた」

何か物思いにふけている少年……なんか、またボツとしてるし、
……ん——……

ポンツ

少年のベッドに乗り上げ頭に手を乗せると、ふえ？とキョトンとした目が私を見る、…クツ…私はシヨタコンじゃない…

…ええい、前言撤回っ！認めよう！私は可愛いものの好きだっ！ただ可愛いのが好きなだけだ！シヨタコンじゃないっ！

「えーと、…上手く言えないけど…なくなちゃったものは仕方ないけど、もう一回、…一からやり直せば大丈夫だよ、だからそんな顔しないで…ね。」

少年はキョトンとした後、小さく頷く。

「よくわかんないけど、がんばる。」

「んっ。それでよし」

頭を撫でてあげると恥ずかしそうに俯いてしまう。

それにしても、これからどうしようか。

このままだと孤児院行きかあ…孤児院ってどんなところだろう……教会か？

そういや、今更だが私…まだ自分の今の姿見ていない。

髪を摘み見る、こげ茶色の髪だ…

鏡は…この部屋にはないか。

少年にちよつとゴメンね、と言って病室を出る、えーと…トイレ、トイレ…

…あつた。

中に誰も居ない事を確認した後、手洗い場に付いている鏡で自分の

姿を確認した。

鏡に写し出された顔に目を見開く。

……そこには見慣れた顔があった。

本来なら重症で昏睡状態の少女……最初は見知らぬ少女に憑衣した
と思っていたが、違った……

『私』が、……《彼女》に憑衣したんだ。

確かに『私』は《彼女》のデータを元に出来た身体だし、じゃ、あの記憶は《彼女》の最後……いや、《彼女》が彼女であった記憶か……
……今の私は《彼女》の犠牲のおかげで生きているわけか……

まあ、とりあえず……あの野郎……！

聖杯の力で何とかするって言ってたから身体を作ってくれたと思っ
たじゃねえかつ！

憑衣するなら最初に言えよっ！

やり場のない怒りにチツと舌打ちをする、はたから見れば実に子供
っぽくない。

横暴だろー、とどっからか聞こえた気がしたが気のせいだ。

それに、しても……憑衣の影響か本来の茶色い瞳は琥珀色に変わっ
ているし、あと、……なんでか幼児化してるし……《彼女》は高校
生くらいだったけど、今は見る限り6、7歳位かな。

あの記憶から探る限り、《彼女》の両親はもう居ないし親戚はどう
なんだろっ……とりやえず、病室に戻ろっ。

トイレを出て病室に戻ると、さっきまで居なかった黒いコートの男
と少年と何か話している。

「あ、
」

少年がこっちに気がついた、男が振り返る。

ボサボサの髪にくたびれたスーツにコート……あの場で出会った男
だ。

「こんにちは」

「……あの時の、」

親しげにニツコリと笑う男、名前は衛宮切嗣。
今頃だが、少年は士郎と言う名らしい。

切嗣さんは士郎を引き取りに来たそうだ、よかった……不安はあるけどこの人なら士郎を任せれるかも。

「さて、本題にはいるけど」

「んっ？」

なんだ？

「率直に訊くけど、君は孤児院に預けられるのと、初めて会ったおじさんに引き取られるの、どっちがいいかい？」

え、私も？そうだなあ……

「じゃ、孤児院」

スパッと切り捨てる様に即答すると、ものすごくショックな顔で固まってしまった。

顔文字にしたらこんなん。Σ(「□」；)

って、士郎も何かショック受けてるしっ！？

あー、泣きそうな顔してこっち見るなっ！

うう、……………」。

「ごめんなさい、ウソです。」

「え、じゃ、おじさんと来てくれるのかい？」

何故そんなにキラキラした子供の様な目が出るっ！？顔近っ！

「えーと、おじさんとここに行きます。」

「そうか、よかった。なら早く身仕度をすませよう。」

新しい家に一日でも早く慣れたくちゃいけないからね、と嬉々と私と土郎の荷物を纏めだす切嗣さん。

なんか、子供みたいな人だ……

呆れた顔をして見ているとあ、と切嗣さんが振り返ると私と土郎にニツコリ笑う。

「大切な事を言い忘れた、家に来る前に……一つだけ教えなくちゃいけない事がある」

二人して首を傾げる。

「初めに言っておくとね、僕は魔法使いなんだ」

魔法、使い……？それは、ウィザード魔術師のこと……それともメイガス魔術師のこと？

……この人、魔術師なのか？

なら、この世界の魔術の事を知っているかもしれない……

「うわあ、じいさんスゴいな。」

爛々とした土郎の目。
私ものった方がいいよな。

「スゴいね、切嗣さん」

照れた様にへニヤッと笑う切嗣さん、その笑顔はまるで救われた事の笑みに似ていた。

そういえば、と切嗣さんが両手に荷物を持ったまま振り返る。

「君の名前、まだ聞いてなかったね」

え、切嗣さん知らなくて私を引き取ったのかよ。
土郎もそういえば、とこっちを見ている。

……困った、《彼女》の名を言えいいか『私』の名がいいのか……
でもこの場合は『私』の名か、でも……私の名前は……

「……、う。」

「「えっ？」」

「……しろっ。」

「んっ？」

「おれ？」

首を傾げる土郎に首を振る。

「違うよ、私の名前……私はしろつ、白い兎と書いて白兎^{しろて}」

士郎と切嗣さんはえつ、と顔をしている。

あつー！だから名乗りたくなかったのにっ！しろつなんて男みtain名だし、学友にも男みたい名だねって馬鹿にされたしっ…………

「しろつ」

「…………えっ？」

突然、名を呼ばれると士郎が手を掴んできた、目もキラキラしてるし…………どうした。

「しろつ、いい名前だね…………おれとおそろいだし、何より白いウサギさんでしろつなんてすっごくかわいい、しろつにピッタリの名前だね。」

「えっ？…………そうか、な…………。」

「うんっ」

「…………ありがとう。」

精一杯笑ってみせると士郎は顔を真っ赤になってしまった。
そいいえば、セイバーにも凜々しき名だ、と褒められたなあ…………

「にしても、しろつか…………なんとも、男らしいなだね」

ハハハッ、と笑う切嗣さん…………ピキッと青筋を立てて笑顔のまま切

嗣の足元に寄る。

とりやえず、切嗣の脛を思いつきり蹴飛ばした。

「じゃ、しろつはおれより一コ下なんだ。」

うんと頷く、士郎は7歳なので流石に歳まで被るのはマズいと感じ6歳と言う。

「じゃ、今日からおれがお兄ちゃんだね。」

嬉しそうに笑う士郎に釣られて私も笑う。

うおお…、と唸る切嗣は眼中になし。

こうして、私は衛宮白兔として生きる事になった。

第三話・病室での再会（後書き）

つてことで、女主の名前は「白兔」にしました。

あの縁側のシーンまでの間を書いていく予定です。

第四話・穏やかな朝（前書き）

あの出来事から、二年経ちました。

士郎の魔術回路については何も言わないでください… o r z

10 / 26 加筆修正

第四話・穏やかな朝

目が覚め、窓の障子を開けて外を見る。

まだ朝日は昇る少し前、というところだろう。

ベッドから降りて、着替えると部屋を出た。

洗面所に向かい顔を洗い髪を梳くとまず、洗濯物を分けて洗濯機を回す、その次に新聞を取り、居間の机に置き台所に向かう。

戸棚から小鍋を出して水を入れて鰹節、煮干し、昆布でダシを入れて火をつける。

あ、切嗣さんまた洗い物してない……仕方なく置かれた皿を洗い、水気を拭き取り食器棚に入れる。

さて、たしか冷蔵庫に……鮭の切り身があつたな……あとは……

ガラッ

「んっ？」

居間の障子が開けられ、赤毛の少年が慌てた様な顔をしている。

「おはよう、士郎」

「おっ、おはよ、しろっ……」

現れたのは私の一コ上の兄・士郎だ。

「今日も私の勝ちだね。」

「くっ、今日こそは、っと思ったのに……！」

悔しそうな士郎と違い残念だね、と笑う私。

衛宮家に引き取られて二年たち、私は8歳になった。

現在は私と士郎とで、朝どっちが先に家事をするかで競っている。発端は引き取られた直後、義父の切嗣さんはとにかく家事が出来ない人だった。

洗濯をしようとすれば、洗濯物を破るは、掃除をすれば余計に散らばるは、ご飯にいたってはインスタントとジャンクフードだし……暫く我慢していたが流石に士郎も耐え切れなくなり、二人で早起きして白米と豆腐の味噌汁を作ると切嗣さんがビックリしてた、そりゃ7歳と6歳の子供が料理ですもんね。

で、何故泣く……塩辛かったのかなっと思っただが切嗣さんうまいよ、ともう幸せそうな顔をして美味しいと言ってくれたのが、嬉しくて二人して。

「今日から家事は、おれ／私がやるっ！」

と声を合わせて言う。

それから、士郎と早起きしたものの勝ちで競争している。

「これで、19連勝だね」

「くっ、明日は負けないからなっ！」

「フフン、明日私より早く起きれるよう、頑張ってね」

「あっー！しろっつ！妹の癖に生意気だぞっ！」

「ねばすけのお兄ちゃんに言われたくないですー」

もうすっかり日常茶飯の兄妹喧嘩を終え、拗ねてしまった兄の背中に苦笑。

あーもー、可愛いーなー。

でもいい加減に機嫌治してもらわないとな。

「ねえ、士郎、今から洗濯物干しに行ってる間お鍋任せれる？そういえば、冷蔵庫に鮭があつたなあ」

「！、おう、まかせろ！」

パツと明るく返事をする士郎によろしく、と頼んで居間を出る。まったく、士郎は単純と言うより素直だ。

二年、……その間に私が知る事ができたのは私がいるところは日本の冬木市という地方都市。

アンリ・マユが言っていた聖杯戦争の舞台となった地……同一ならば、此所が聖杯があるという事。

その地に現在、私と士郎と私達の切嗣さんとで無駄に広い武家屋敷に三人で暮らしている。

私と士郎は名前が同じ「しろ」でわかりにくい為、切嗣さんは士郎を「士郎」

、私は「シロ」と呼ばれている。

士郎は切嗣さんをじいさんと呼んでいるため、いい加減、切嗣さんって呼ぶのも余所余所しいので「お父さん」と呼んだら、何故か突然失神してしまった。

なんでだよ。

さて、話は戻るが、この世界では魔術師^{メイガス}が存在し。切嗣さんがその魔術師である事を知ったのは最近……。

切嗣さんの説明では、私の知る魔術は自らの魂を霊子へと変換し、
SE·RA·PH
霊子虚構世界の管理するシステムにアクセス・介入することで世界
の理を捻じ曲げることで使う魔術だが。

この世界の魔術とは、魔術回路と呼ばれる体内の疑似神経を介して
行われる……いわば魔力^{マナ}の入れる器だ。

大気中の魔力を自身の魔力に変換することで魔術が使用できる、
だが、誰もが魔術回路を持っているわけではない。

詳しい事は教えてはくれなかったが、魔術回路がなければ魔術は使
えないということだ。

引き取られた後、私は自分の身体を解析した時に私の中には二つの
回路がある事がわかった。

一方は、こっちの世界の魔術回路。

もう一方は強大な力を持っている。おそらく、それはムーンセルに
繋がっている。

……現在は閉じているが、何度かチャレンジをしたがいまだに上手
く使いこなせていなく、どんな様に使うか試してみないとわからない。
い。

こっちの魔術も学ぶ為、士郎と一緒に切嗣さんに無理に頼み込んだ
が、返事はノー。

切嗣さんにとっては、私達には平穩に生きてほしいのも分かっている……
……だけど、私は一度はあの戦いを体験している……この地にある
聖杯をどうにかして止めないといけない……そうでないとなた、
未来永劫戦いは終わらない……だから、私は知らなくてはいけない
……この世界魔術を。

士郎も、切嗣さんに憧れを抱いているし、切嗣さんの様になりたい
と願っている……

何度も頼みこんだが、やっぱり返ってくるのはノーだけ、だが、そ
れで諦める私達じゃなく……作戦を変えた。

『じいさん……』

『お父さん……ダメ？』

つと、上目つかいの涙目で言った途端に鼻血出して失神してしまった、めんどくさい奴だと思ったのは黙っておこう。

結局、私と士郎は切嗣さんに弟子入りした。

……だが、問題があった。

私と士郎には魔術回路があったが、……本数が少なく

おまけに士郎の魔術回路は神経と一体化してうまく魔術行使ができない状態だった。

そこで、切嗣さんは士郎に魔術回路を1から作成させていたが、それをする度に士郎は死にかけるので、つい素に戻って「この馬鹿親父っ！士郎を殺すのかっ！？」と回し蹴りしてしまった、反省はしている、うん。

で、改善として……なんか、……切嗣さんの奥さんところから頂いたいかにも怪しいですよと言いたくなるような薬を飲まされ、強制的に魔術回路を開けた……ちなみに、私は過去に一度開けていて難逃れた、ごめん士郎。

これで、開けることでいちよは解決したが、無理に開けてしまった為か四肢を引き千切られる様な激痛に士郎は暫くトラウマになってしまった……。

一段落したところで、また問題が起きた。

切嗣さんとはにかく教え方が下手だった。

代わりとして体術と武器の使い方を習うことになった。

なので、私と士郎は独学で魔術の勉強することになった。

本とかは、切嗣さんがどっかから持って来たのを読みながら少しずつ……

まずは、回路の開け閉めから初め、現在は基礎を学んでいる途中だ

……

洗濯物を干し終え、空を仰ぐ……朝日が気持ちよく大きく伸びをす
る。

縁側から家に入ると鮭の焼ける良い匂いがしてきた。

目を細め、身体に満ちる温かさに口元を緩める。

穏やかな日々、大切な私の家族……

けど、私には知らないといけない事がまだある……

あの火災のことを……あれは聖杯から溢れだした魔力ではないか……

……おそらく切嗣さんが何か知っている。

機会は士郎が寝付いた夜にしよう……

台所に戻り、士郎と台に乗りながら調理していく。

「士郎、だし巻き卵できたよ。」

「ん、こつちもできた。」

ガラッ

「あ、」

「おっ」

二人して振り返ると、なんとも情けない顔をした男が入ってきた。

「おはよう、士郎、シロ」

「「おはよう、じいさん／お父さん。」」

うん、おはようとへニヤッと笑う義父、切嗣さん。

今日の朝ご飯は、白米に豆腐の味噌汁、だし巻き卵、鮭の切り身に焼き海苔と純和風の献立が並んでいる。

四つ並べる終え、お茶を沸かす為にヤカンに火を掛ける。
そして、来訪者を待つ事数十秒……

ドタドタッ……

ガラッ

「おっはよ——うっ！」

ポニーテールを揺らし慌ただしくあらわれた少女に士郎は嫌そうな顔をした。

「また来たのか、タイガー」

「むっ、士郎っ！その名で呼ぶなと何度言っただっ！」

藤村大河、この屋敷の管理者の孫で、よくご飯をたかりに来る傍迷惑な雌の虎だ。

最初に会った時は、驚いた……あの月の聖杯戦争中に何度か話しかけられたあの、『藤村大河』に似ていていた……

直感でわかった、この藤村大河があの『^{NPC}藤村大河』のオリジナルと
いうことを……

同時に彼女の存在からあることを思い出した。

『^{聖杯}ムーンセルの記憶の蔵書の中から「かつて聖杯戦争に関わった人物」を再現している、……この地に聖杯がある可能性も知った。』

「藤姉さん、いらっしやい」

「白兎ちゃんっ！おはよ、きーてよ、士郎ったらまた虎呼ばわりしてきたんだよー」

虎を虎って言うて何が悪いっ！と士郎が私に張り付いた虎を剥そうとしている、

あー……耳元で騒ぐなー。

切嗣さんも笑ってないで何とかしろよ……。

こうして、私の一日は始る。

第四話・穏やかな朝（後書き）

現在の投稿の中で一番頭を悩ませました。

あ、私…ビジュアルストーリー持ってんじゃないか……私の馬鹿っ！

第五話・桜と白兔（前書き）

書きたかったのがやっとできた！。

なんとなく、この二人を絡ませたくて、ない脳で書きました。

第五話・桜と白兔

「そういえば、二人は何か欲しい物はあるかい？」

「「えっ？」」

朝食も終え、藤姉さんは朝練に向かい、私達は登校前に食器を片付けている最中に突如問われた質問に二人して首を傾げる。

「ほら、君達が来て二年たつし……去年は出来なかったから今年は
と思つて……その記念に。」

そういえば……去年にそんな事言っていた気がした。

この人、よく家を留守にしている、小さい子を置いて何処私らに行つて
いるんだか……まあ、あまり首を突つ込まない方が切嗣さんにとつ
てもいいだろう。

「じゃ、圧力鍋……魚が骨まで柔らかくなるし。」

「物干しかな……シーツ洗うと衣服の干場がなくなるからもう一本
欲しいなあ……」

「なんて夢のない子供らなんだ……！」

「「……」」

膝と手についてドヨン、と暗くなる切嗣さん。
士郎と目を合わせ、溜め息をつく。

「シクシク……」

「……サッカーボール」

「髪飾り」

「！」

「じゃ、いつて来るな。」

「お父さん、戸締まりちゃんとしていてね。」

「ちょっと、二人ともっ！」

引き止める切嗣さんを無視してランドセルを手に玄関に向かう。

「「いつてきまーす。」」

「士郎、シロ……いつてらしゃい。」

クスクスと笑う切嗣さんに耳まで赤くする私達は急いで家を出た。

「お父さん……なんだか嬉しそうだったね」

そう問い掛けると横の士郎は呆れた様な顔をしている。

「そうか？……じいさんはなんでも突然すぎるんだよ、それに、物なんかより……」

…」

そばにいてほしい、と呟き俯いて黙ってしまう土郎。

分かっている……土郎はただ切嗣さんと一緒にいるだけでいいって事くらい、でも土郎は切嗣さんを困らせたくない。

まったく、少しは男の子らしくなってきたと思ったけど、まだまだ甘えたがりなんだから……よしっ

「じゃ、お願いしてお父さんと一緒に寝てもらおうかな。」

「えっ！？でも、しろっ……この前、じいさんとは寝ないって」

「えー、そうだったけど、たまにはいいかなって……あ、土郎は自分の部屋で寝ててもいいから。」

「なっ！？」

「私とお父さんで、なかよく、寝ているからさ。」

「グッ……しろっがじいさんと寝るならおれも一緒に寝るっ！」

「えー、でも、土郎……この前——」

「あっ——あっ——聞こえないっ——！」

耳を塞いで、駆け出す土郎に待ってよー、と追いかける。

夕方近くに学校から帰宅しランドセルを部屋に置くと、居間を覗く

……切嗣さんが居ない……また遠出か？

あ、置き手紙だ……『夕ご飯までには戻ります』、か……夕ご飯どうしよう……

鮭のムニエル……肉じゃが……キノコもいいな……マーボー……

「は、なんかいやだ。」

頭の中に浮かんだ高らかに笑う神父を消し、買い物籠を手に商店街に向かう。

今日は鶏肉と野菜が安かった。

肉屋のおじさんがオマケしてくれたから、沢山野菜も買えたから帰ったら早速、料理しよう、カレーがいいかな、あ、唐揚げもいいな……それとも焼いて食べようかな、ご飯と朝の味噌汁に、冷蔵庫に漬物がたしかあったような……んっ？

なんか……公園の方が騒がしいな。

子供がはしゃいでいるとは違うような、……ちよつと見てくると足を外れの公園に向かう。

土地が狭いせいか遊具の少ない公園の一角に三人の男子が何かを囲んでいる。

あの男子ら、うちの学校の上級生じゃんか……犬でも苛めているのかなと思ったが、囁り泣く様な細かい声が聞こえてきた。

「かえして、ください……」

「あー？聞こえないぜ？なんだって？」

「こんな布切れが大事なのかよ」

ゲラゲラと笑う上級生、その真ん中で泣き出しながらも上級生の一
人に向かって手を伸ばす藤色の髪をもつ少女。

「あ、……」

その髪色をもつ少女を私は知っていた。

あの戦争の中で何回か声をかけた長い藤の髪にリボンを付けた少女

……

「さっ——」

違う。

誰かがそう言った……そうだ、私の知る少女は『過去の人物』の『
再現』だ。

別人、だ。

関わる必要はない、帰ってご飯を作らないと……

「やーい、ノロマ！」

「どーした、取ってみろよ」

「お願いします、それはっ……」

……帰って、ご飯、を……

あー、もうっ！

溜め息をつき買い物籠を置き、公園に足を踏みこみ、スイッチを入
れ替える。

「おい、悪ガキ。」

突然現れた、こげ茶色の髪の少女。

私を囲んでいた男の子達に向かって不機嫌そうに悪ガキって言いつつ。

男の子達は何だよと私に背を向けた。

「そんなか弱そうな子苛めて楽しいか？楽しいだろうな、なんとつてガキは弱い

モノ苛めしか取り柄がないもんなあ」

「なっ！？」

「おい、お前それがオレらに使っていい言葉つかいか？」

「ん？、お気に召さなかったか？それは失敬、なんせ事実を述べただけですからね」

ニツコリと笑うが目はまったく笑ってない。

目に見えて苛立つ男の子達と対象にクスクス笑う少女

「少し、痛い目にあわないとわかんねえか？」

「なんだ？口では勝てないから暴力で話をつけるつもりか？やっだなあ〜これだ

からガキは……」

「うるせえ！」

一人が駆け出すと残りの二人が後を追う。

拳が少女目掛けて飛んできたが、ひよい、と横に身体をずらし拳は空振る、勢いで走って来た為、少女を足かけをすると先頭の男の子が転び、残りの二人も前の男の子に躓き転んでしまった。

「無様。」

クスクスと見下ろして笑う少女に男の子達はプライドが傷ついたのか覚えていれよー！と公園を去って行ってしまった。
残ったのは私と少女だけ……

「おい」

「は、はいっ！」

ツカツカと近付いてきた、殴られるっ！と目を瞑るが痛みはなく、キュツと音に目を開ける。

「これでいい？」

「えっ……？」

左の髪に触れると、柔らかい細身の布……リボンだ。

取り返して、くれたの？

ジッところちらを見つめる無表情な少女……綺麗な琥珀色の瞳……

「大丈夫…？」

「あ、はい……大丈夫です。」

そっか、とさつきと打って変わって穏やかな声……

「あの、………ありがとうございます。」

「お礼なんかいいよ、私が好きでやったただけだから……」

ポンッと頭を撫でてくる少女。

最初は驚いたが、なんでか凄く嬉しかった……暖かい手。頭を撫でてもらうなんて……何年ぶりだろう……

「さて、」

頭にあった掌が降ろされ、少女はそれじゃ、と去ろうとした、咄嗟にその手を取った。

少女は不思議そうにこっちを見ている……

「お、お礼………させて、ください。」

お礼？と首を傾げる少女は、暫く考えるとじゃ、と逆に手を掴まれた。

「今度の土曜のお昼くらいに、ここで待ち合わせでいい？」

「え、」

「一緒に遊ば、ね」

ニツコリ笑う少女にうんと返した。

「私、桜っていいいます。」

「桜……良い名前だね、私は白兎、白い兎って書くんだけど男の子みたいな名前でしょ？」

「そ、そんなことないっ！可愛い名前だし、シロちゃんにピッタリだよっ！」

「…………シロ、ちゃん？」

ハツとして慌てた、初対面の人にちゃん付けして呼ぶなんて……と慌てて謝ろうとしたが、少女は目を丸くして顔を赤くしていた。

「シロちゃん……そう呼ばれるのは初めて……うん、シロちゃん、可愛い名前って言われたのは二回目だ。ありがとう桜。」

満面の笑みを浮かべる白兎……釣られて私も笑う。

その後、途中まで一緒に帰り、またねと手を振って別れた。

すっかり帰りが遅くなり、既に帰宅していた切嗣さんに大丈夫だったかいっ！？と質問攻めに迫られ、公園での事を話すと女の子がそんな口したらダメ！と怒られた。

士郎と夕ご飯を作り、三人で食べ、思い思いの時間を過ごし、就寝前の挨拶を済ませ其々の寢床に……

夜も更け、二人の子供が寝付いた頃、ひっそりと縁側に座り月を眺める。

二年……あの呪いを浴びて早二年も経つ。

胸に手を当てあとのくらいこの身体は保つだろうか、と目を閉じた。

出来るならば、あの城に残してしまったあの子と四人で魔術と遠退いた平穩に暮らしたかった…だが、現実はそう甘くはない。

あの子とはもう会えなく、二人の子供は魔術を習い始め…そして、もう一つ。

ギシ……

廊下が軋む音に目を開けゆつくりと首を動かす。

月明りで照らされたこげ茶の髪に琥珀色の瞳がキラキラと輝いていた。

ああ、あの鋭い瞳の光を見たのはこれで二回目だ。

「衛宮切嗣、アンタに話がある。」

その口から発した言葉に、ああ、と答えた。

その桁違いの『魔力』を宿す、娘に思わず…唾を飲み込んだ。

第五話・桜と白兔（後書き）

次回、過去の聖杯の参加者と未来の参加者の談話です。

ZERO未読なので、Wikiさん頼りです。

第六話・月光の下での対談 前（前書き）

切嗣さんと白兔の談話・前編です。

個人的に書きなおす点が多い気がします。

第六話・月光の下での対談 前

月光の下、見上げる切嗣さん、見下ろす私。
士郎が寝付いたのを見計らい、縁側に座っている切嗣さんに近付いた……

「まあ、座りなよ。」

「……………」

この人は……。

なんて緊張感がないって言うか……

ニコニコしながら隣をポンツと叩く……なんて言うか、楽観的、かな？

埒があかないと仕方なく、隣に座る。

「……………」

「……………」

お互い無言のまま、チラツと盗み見みるす。

穏やかそうにしているが若干顔が強張っているようだ。

「衛宮切嗣、アンタは魔術師なんだよな」

ピクツと肩を振わせる。

「ああ、そつだよ……………」

そっか、と切嗣さんをまっすぐ見つめる。

「なら、聖杯戦争って知ってる？」

え、と驚愕の顔で目を見開いてこちらを見ている。

「その様子だと、知っているようだな……」

「どうして、シロがそれを……」

「先に答えて、聖杯戦争を知ってるの？」

「君は、……一体……」

「……………」

切嗣さんの瞳に、困惑が浮かびやがて、フツと笑う……その瞳に浮かぶ闇は、後悔と絶望に似ていた。

暫く沈黙が続いたが、切嗣さんはああ、と呟いた。

「そうだよ……僕は、この冬木にある聖杯を求め争った……七人の内のマスターの一人だ。」

目を細めやはりか、と思った。

しかし、気になった事があった。

切嗣さんは『七人』と言った。

どうやら、冬木の聖杯は私の知る聖杯とはルールが違っらしい……

「衛宮切嗣……続けて問おう。二年前のあの火災、あれは……アンタ達が起こしたのか？」

切嗣さんはああ、と答えた。

その後、切嗣さんは話だした。

その口から紡がれた言葉は、歪んでいて、愚かな男の話だった。

『魔術師殺し』……それが、私達の出会う前の衛宮切嗣の異名だった。

男は幼少時から『正義の味方』に憧れ、正義の味方であり続ける為、多を救う為少を切り捨て、幾度も『人を救った』。

その為に、かつて母であり姉でもあった師を見捨て、愛した家族すら天秤に乗せる覚悟をし、非道な暗殺やテロ行為をしてきた。

そんな男は、妻の一族の悲願の為、幼い娘を置いてサーヴァントと共に聖杯戦争に参加した。

やがて、聖杯を掛けた戦いは終焉を向え、男はサーヴァントに令呪で聖杯の破壊を命じた。

だが、それが聖杯の中身を溢れだし地上を火の海に変えた。

そう、それはあのステンドグラスの間で聞いた話と同じだった。

あの火災はやはり聖杯によるモノだった……。

そして、その炎は……《彼女》と士郎^兄の大切なものを奪った。
ギリツと齒を食いしばり俯いた。

話終わると、白兔は黙ったまま俯いてしまった。
この子はいつたい何を知ってるのだろうか……

あの鎮火された地で会った時から感じた魔力量に普通ではないと確信し、言峰より先に引き取ったが、その時にはあの海の様な色彩の瞳ではなく、士郎の瞳より淡い琥珀色の瞳をしていた。

魔術に関しても理解も早く、魔術回路も調べ所、一度だが開いていた。

聖杯戦争……この子とどういう関係があるんだ？

「衛宮切嗣」

ハッと現実に戻り、白兔の方を向く、俯いていた頭が上がり、こちらを睨みつけてきた。

その瞳に浮かぶ見慣れた色……怒り、憎しみの色。

「アンタは、士郎から大切なものを奪った」

「……………」

「家族、友、家も、大事だった記憶すら……！」

「……………」

返す言葉もない、慣れたはずの言葉がこんなにも痛むとは……

僕がやった事が士郎達の未来を奪った。

この罪はどんな罪滅ぼしをしても消せはしたない。

「許さない。」

ビクッと肩が跳ねる。

「私は、アンタを——……」

士郎の大切なものを奪った魔術師殺しを私は絶対に許さない。」

何度も言われ続けた言葉の棘が胸に刺さる。

「……でも、」

「？」

突然と視線を逸らし俯いたが数秒したあとに顔を上げた時には、瞳から怒りや憎しみの色が消え……
その瞳は、哀愁が帯びている。

「私は衛宮切嗣^{お父さん}を許す。」

はい……？

意味が分からず頭を傾げると白兎はクスツと笑う。

「だから、私は多の為に少を切り捨てた残忍な魔術師な衛宮切嗣^{アンタ}を許さないが、私と士郎を救ってくれて家族になってくれて、沢山の思い出をくれた衛宮切嗣^{お父さん}を許すって言うていの。」

「——、」

言葉を失った。

柔らかく笑う白兎、この子は何を言っているんだ？

「シロ……それは、」

「分かつてる、正直いえば……貴方のやってきたのを私は半分も分かっていないし……貴方の罪は軽くもない、けどさ、貴方の救った命は此所にあつて貴方に感謝してる……誰も貴方を許さなくとも、」

私は貴方を許します、と自身の胸に手を当ててはにかむ白兔……

ああ、自分は、大切なモノも愛する者をなくしたが、まだこの手で守るべきモノがあつた……

「ありがとう……」

優しく頭を撫でると白兔は驚いたようだが顔を赤くして俯いてしまった、けど満更でもなさそうだ。

「白兔」

「？」

頭を上げると切嗣さんが真剣な顔をしてこちらを見つめる。直感でわかった、切嗣さんが言いたい事は……

「なんで、私が聖杯戦争を知ってるか？」

切嗣さんは間を置いて頷く。

「……わかった、お父さんがせっかく話してくれたし……」

ゆっくり月を仰ぐ……

「お父さん、今から話すことは……私が体験した……本当の話。」
まだ、何も知らなかった頃の『私』の物語り。

第六話・月光の下での対談 前（後書き）

やっと、書けた…！

仕事が忙しくなり、PCも触るのも休日くらいになってしまいました。が、なんとかかけました！

次はいつ更新できるかわかりませんが、がんばります。

ご意見してくださった方々ありがとうございました。

切嗣さん生存の話ですが、皆さんのコメや自分なりの考え。

例えば白兔の力でもきつと寿命が延びるくらいで聖杯戦争まで持つかもあやふや

それによくよく考えれば切嗣さんの死が士郎の生き方の原点でもあり、スタートでもある。

個人的には生きて欲しいですが、話的には他界という形に…生存をご期待の方々には申し訳ありませんでした。

切嗣さんには違う形で登場させたいです。

第七話・月光の下での対談 後（前書き）

白兔の聖杯戦争の話です。

第七話・月光の下での対談 後

「……私、……いや、ある一人の少女は、遙か先の……かなり未来に行われた聖杯戦争の参加者だった。」

「未来……だつて？」

信じられないって顔をして目を見開いている。
なんと言うか……間拔けた顔だ。

「……信じてくれなくてもいいって……続けるよ？……その少女の参加してた聖杯戦争の舞台は……」

スッと空を指差す。

「……月？」

「そう、少女の参加した聖杯戦争の舞台は月」

ジッと月を見上げていたが気配で切嗣さんは驚いているのがわかり、苦笑する。

「『ムーンセル・オートマトン』……月で発見された太陽系最古の物体とされる自動書記装置、それが聖杯とされ、……参加者達は『セラフSE・RA・PH』と呼ばれるムーンセル内部に造られたコンピュータによって確立された霊子虚構世界の仮想現実世界で聖杯戦争は行われた……。」

月海原学園……それが、聖杯戦争の舞台となった学校、……予選で

は999人、本線開始地には128人に減り。

128人は仮想現実世界にアクセスしそれぞれに与えられた七つのクラスの内の一つのサーヴァントと令呪を得て、聖杯戦争に参加する。

「この辺は、お父さんが体験した聖杯戦争と多少違うけど同じだね。」

「ああ、……シロ……少女もその内の一人ってことは……彼女もサーヴァントを？」

「うん、少女はセイバーを……いや選ばれたって言った方がいいかな。」

「？……選ばれた？それは、——」

「話を戻すよ、えっと……冬木の聖杯ではバトルロワイヤルでやってみたいだけど、ムーンセルでは一對一のトーナメント式で行われた。」

始めに手渡されたのはケータイ端末機って言う機械とマイルーム……ようは自分の陣地。

少女ら、マスターは対戦相手のマスターが発表される、この地点ではサーヴァントのクラスはまだわからない。

戦闘は校内では禁止され、マスターとサーヴァントはアリーナと言う迷路の様な場で暗号鍵トリガーキーと言う決勝までに必要な鍵キーの搜索とサーヴァントの鍛練を六日間の内に行う、因みにアリーナも戦闘は禁止されているが、一時的なら可能。

それから、端末機に搭載された機能の一つ、「情報マトリクス」。これは相手のサーヴァントと闘う前に猶予期間が設けられるその期

限中に相手のサーヴァントの情報を集める、サーヴァンのクラスを含めて全部で四段階に分かれている。

「わかりやすくいえば、敵サーヴァントの真名を知る手掛かりと言った方がいいかな。……それを頼りに相手サーヴァントの真名を証し、六日後の決勝に挑む……簡単な説明はこのくらいかな。」

「なるほど……しかし、気になるんだが……決勝で敗れたマスターはどうなるんだ？」

「……………、それは……………」

ギョツと服を握り締め、俯く。

「負けたマスターは、敗北した瞬間に赤い壁に阻まれ……………全身が黒く侵蝕され……………消える。」

「え、…きえる？」

「『聖杯で破れた者は死ぬ。』……………敗れた者はS E・R A・P Hには居られない……………」

不要データとして消去され、それはリアルの自分も同じ、電腦死つて形で死ぬ……………これが敗れた者の最後。」

「……………」

「……………勝者は次の対戦相手と割当てられる……………始め居た128人は半分に減り、64人となる……………後は、同じ事の繰り返し……………」

淡々と簡単に説明を繰り返し最後の一人はサーヴァントと聖杯を得

た、と言って。

説明おしまい、と告げると切嗣さんは不思議そうにこっちを見ている。

「わかってるよ、此所から……ある少女の……聖杯戦争」

少女は、ある戦いに巻き込まれサーヴァントを召喚しその戦いに参加する事になった。

しかし、不都合で少女は記憶がなく自身の名しからずにいる。
そんな少女が、始めに戦ったのは学友の少年……

少女は、困惑しながらも学友の少年のサーヴァントの情報マトリクスを集め……
決勝で勝利した。

その後、少女は元軍人の狙撃手と戦い勝利したが彼との出会いで少女は『覚悟』
を学んだ。

次に戦ったのは、幼く無邪気な少女。

その次に戦ったのは、歪んだ性格を持つピエロの女性。

その次に戦ったのは、ある執念を持った漆黒の男。

その次に戦ったのは、——……

「……シロ？」

「あ、ごめん……えっと、次に戦ったのは……不思議な雰囲気を持つ、褐色の少女……」

ギュッと服を握り締める。

いつも星を見上げていた不思議な少女……
今更ながら、もしも《“IF”》を考える。
もし、あの時……赤の少女でなく彼女を選んでいたら……いや、決
めたはずだ……『後悔はしない』つと。

「白、兎？」

「あ、……なんでもない……続けるよ。」

次第に少女は自分の存在がわかった……
少女はリアル……現実世界に存在しなく、少女はムーンセルにデ
ータだけで存在しているということを。

やがて、二人だけ生き残った……最後の対戦相手は、生まれてから
”王の器”とされていたが、人間性の欠けた少年だった。
苦戦しながらも、七人の魔術師^{マスター}を倒した少女は……聖杯を得た。

「……………」

切嗣さんはそれで、と目を向ける。

少女は、聖杯のある間に足を踏み込んだ……が、先客が居た。

『トワイヌ・ピースマン』……医師であり研究者の彼は数々の成果を
残し、戦場や災害の場に足を運んだ偉人。

しかし、彼はあるテロに巻き込まれ死に際に戦争を憎むつつもその
必要性を否定できない己に気がつき。

彼はムーンセルで自我のない存在で復元された。

だが、何らかの過程で自我を持ち、戦い聖杯にたどり着き……戦
争を求めた。

しかし、彼は聖杯には触れられなかった……だから、彼は少女に『戦争を求める』よう言い放った。

しかし、少女は断った。

少女はこれ以上、無暗な争いをやめさせる為に聖杯を封印すると決心していたから……

彼と少女は戦った…勝利したのは少女。

彼……『トワイス・ピースマン』だった人は消え……

少女は、聖杯に望みを言った。

^{ハインセル}
聖杯の封印。

『トワイス・ピースマン』のばらまいた戦争の火種の消し去る。

あえて、あの赤の少女のことは言わなかった……

何故？

それは……自分でもわからない。

けど、話さない方が良いと思ったから。

「その後、彼女は聖杯によって身体を分解された……その際、少女は知った。」

少女は『トワイス・ピースマン』と同じで何かしらの過程で自我を持った自我のない存在で、少女の元となった存在は、ある災害で難病にかかり冷凍昏睡によって保存された少女を元に作り出されたことを……

そして、少女はゆっくりと分解されていった……

その際、少女は……願った。

——もう少し、いたかった。

その願いは誰にも聞かれる事はなかった……

はずだった。

「え、？」

今まで無言だった切嗣さんに顔を向けて笑った。

「どーいう事が、もの好きなかだけか気紛れなのか……少女は難点あり過ぎのオプションを背負ったまま新たな舞台に送り込まれた。」

苦笑気味に自身の胸に手を当てる。

「お父さん、私が幾つに見える？」

「？……幾つって、シロは8歳……あ、そっか……」

「あはは、……そうだよ、お父さんらに会う前は……あっちでは17歳の身体だったんだけど、この世界に来た時はこの身体になっていた。これが、少女の……私の参加した聖杯戦争。」

おしまい、と言い切ると切嗣さんはそうかい、と言うと突然頭を撫でてきた。

「お父さん……？」

「……お疲れ様、頑張ったね。」

微笑みを浮かべる、その笑みに目頭が熱くなる。
慌てて俯く私に切嗣さんはずっと撫でていた。

「ところで、話に出てきた『難点のあり過ぎのオプション』って……
……なんだい？」

「

「ああ、実はさ、なんか月の^{ムーンセル}聖杯と繋がっているんだ、私。」

「………はっ？」

直球に答えれば、切嗣さんは理解できず、暫く唸ってハツとする。

「白兔が聖杯と繋がっているっ！？」

「お父さん、声デカいよ……まあ、そうゆう事。」

「………なんという事だ。まさか、魔術回路と同調してるのかっ！
？」

「いや、この世界の魔術回路とは別の回路みたいなものがあるんだけど……
……こっちの魔術回路の方は開閉は出来るんだけど………ムーンセルの方は、何度か接続に挑んでいるんだけどなんせ膨大にあるから
上手く出来なくて、下手したら身体が保たないし………そうだなあ

……例えるなら、蛇口とちっちゃい湯飲みがあるとするとよ、蛇口が聖杯、水が魔力、ちっちゃい湯飲みが私とする……水が欲しいと思いい蛇口を捻る、蛇口から出てくる水を自分の持つ湯飲みに入れる……けど、どのくらい捻れば水が出るかわからず、ましては持っている湯飲みはどれだけ水が入るかわからず溢れてしまうかもしれない。……今の例えを改めて、魔力と自分の炉とする。」

「んー……つまり、今のシロは、ムーンセルの魔力を上手く使いこなせていないって事かい？」

「そうでもないよ、あの災害の時に一度使ったから多少は使いこなせる……何度か鍛練すれば上手く使いこなされる、はず。それに上達すれば一時的なら空間を歪めせる大魔術もできるかもしれないし……」

「シロ、いまサラッと凄い事言ったよね」

「へっ？」

「なんか言ったつけ……？」

「なあ、シロ……」

暫く何も言わずに月を見上げていたが不意に声をかけられた。

「なに？」

「シロには、夢はあるかい？」

「えっ……？」

突然の問い掛けにしばし呆然とした

夢……か、……

そういえば、セイバーにも同じような事を問われた事があったけど、あの時の自分にはそんなのなかった……

あの世界での自分は無欲で空っぽな存在だった……けど、様々な人々と戦う事で私は様々なことを学んだし、支えてくれた人がいてくれた。

「……私の、夢は、……大切な人が、……笑っていれる場所を、作りたい。」

私の夢……いや、私の願いつて言った方があっているだろう。
今更になって気がついた、私

「今の私は弱くて頼りないけど……いつか、それに……もしムーン^杯セル
を使いこなせる様になったら……お父さんの力になれるかな？」

「……僕の力に？」

「うん……私に出来る事は少ないけど、お父さんの力になりたいんだ。」

「シロ………ありがとう、でもシロが強くなったその頃には……いや、何でもないよ。」

力なく笑う切嗣さんに何故か胸が苦しくなり口を開いたが、もう寝

なさいと言われ渋々だが部屋に戻った。

ベッドに潜り込み、天井を見上げた。

『大切な人が笑っている場所』

今は出来るかわからない。

だが、今更になって気がついた、私の願い……大切な人々^{家族}を守りたい
と思った……

いつか、必ず……成し遂げてみせる。

それが、自身の心を傷付けることになっても……ぜつたいに……

第七話・月光の下での対談 後（後書き）

とりやえず、（私の中では）難題一つクリア、たぶん。

ムーンセルの設定とかいまだに未定なんです。

色々と難題あり過ぎて考えると頭が痛い…

ムーンセルでの白兔の簡単な設定は「に…

月護 白兔（つきもり しろう）

CV：中原麻衣

無感情無口で寡黙な少女。

だが、内心では無茶苦茶毒舌言ってます。

何を考えているかわからないが、苛立つと足蹴りを食らわす。

口調は通常語に男口調まじり。

脚が早い。

焼きそばパンが好物で一回の食事に五個は食べる。

歌が上手く、サーヴァントに好評だった。

密かにユリウスが気になっていたが、それが恋愛とは気付いていない。

私、密かにユリ女主好きです。

第八話・日常その一（前書き）

これから、ほのぼの挟んでいきます。

白兔の秘密が一つわかります。

第八話・日常その一

こんにちは、切嗣さんと聖杯の話をしてから一週間たちました……その間、桜と

遊んだり（大半はお喋り）色々していたが……

現実、士郎と一緒にどっかの公園のベンチに座っています。

「……………」

「……………」

お互い無言のままだ。

もう夕暮れ近く、薄暗くなってきているが隣の士郎は俯いたままムスツと膨れている……その頬は微かだが赤くなっている。

「士郎、帰ろうよ……お父さん心配してるよ。」

ピクツと反応する士郎は膨れっ面でなら一人で帰れよ、と言ってまた俯いた。

「士郎を置いて帰れるわけにはいかないよ……それにすれ違いになるかもしれないし、士郎に何かあったら大変だし、ね。」

「……………」

「しろっつ?」

ギョツと膝上で拳を握る士郎はいきなり頭を上げた。

「しろつは気にしてないのか…？」

「？…何を？」

「何って…火傷だよ。」

火傷……

ああ、火傷の跡のことか。

私の左の二の腕と脇腹にあの災害の火傷の跡がある。

この火傷は私が憑依する前の《彼女》が負った火傷である。

先日、桜をイジメたあのイジメっ子らが、仕返しとかで何度か学校で突っ掛かって来たが特に気にも止めずにつと無視してきたが、ある日どつかから聞き出したのか、私の火傷の跡を言ってきた。しかも、士郎と一緒に時にだ……

で、イジメっ子らの発言に腹をたてた士郎とイジメっ子らが喧嘩をしだした。

最初は、止めようとしたが、イジメっ子の一人が士郎に向かって石を投げてきて、頭から血を流した。

それが発祥で私まで、キレて。

二対三でなんとも幼稚な喧嘩だったが半人前だが体術を習っている私らはアツとゆうまにコテンパンにしたところを騒ぎを聞き付けた教師が駆けて来たところで終えたが、その後、事情を聞いた切嗣さんが来て、相手の親が謝罪して、切嗣さんの数歩後ろを歩く私ら……

家に着いた頃、向かい合わせに座って説教が始った。

今更ながら、この人を怒らせるとヤバいくらい怖い、マジで。

さすが、魔術師が恐れた、暗殺者魔術師殺し。

しかし、何か勘に触ったのか反論した士郎と切嗣さんが言い合いになり……

パンツと乾いた音が響いた。

切嗣さんは士郎の頬を叩いた、突然の事に士郎は呆然としたが、潤んだ目でじいさんなんか嫌いだっ！と言って出て行ってしまい、それを私が追いかけて……もう、追いかける事で必死で周りを見ていなかったため、追いついた後……見知らぬ場所に居た。

近くに赤い大橋があるから、此所は海浜公園だろう……
ここまでよく走ってきたなあ——と密かにおもった。

そして、現在に至る。

「……別に気にしてない。」

「なんでだよ。」

「何でって……それほど気になる様なことじゃないし——」

「気にしろよっ!」

「士郎……?」

声を荒げる。

「どうして、しろつは……自分の事を馬鹿にされたんだぞ!? 普通は怒ってもいいじゃねえか!……しろつはあんな事言われて嫌じゃないのか、悔しくないのか?」

ビックリした……

士郎が私の事をこんなにも思ってくれていたことが……
どうしよう、嬉しい。

「そんなこと全然悔しくなんかないよ、私はそんな柔じゃないしあの人らの言葉なんかじゃ私を傷つけられない、それに私が本気出せば、アッと言う間だし……でも士郎傷つけたアイツら半殺しの刑にするし」

「し、しろっ…?」

黒いオーラが噴き出していたのか士郎がびびってる。
ハッとして、慌てる。

「と、とにかく、私はあんな戯言全然気にしてないし、……でも、私の為に怒ってくれてありがとうね」

覗き込む様に笑うと士郎は真っ赤になって、でも何かあったら言うて欲しいと言って、ベンチから立ち上がった。

「帰ろう……じいさん心配してそうだし、謝らないと……」

「そうだね、でも……あっちの方が早かったね」

指差す方には必死になって走ってくる切嗣の姿が、士郎の隣に立つと二人して切嗣さんまで走って行った。

家に着くなり、士郎は切嗣さんに謝ったがそれよりも先に切嗣さんが士郎を抱き

締め子供みたいにごめんよー、叩いてしてごめんねっとしくしく泣くから士郎が

はいはいと背中をポンポンと叩く。

本当に今更だがこの人が心配だ

第八話・日常その一（後書き）

タイトル変更しました、Unders ea Tsukinowa
《水底の月輪^{げっりん}》とゲールさんが翻訳で教えてくれました。

でも、違和感が・・・

第九話・紅の世界・蒼の世界（前書き）

書きたかったのを二つ入れてみました。

第九話・紅の世界・蒼の世界

夢を見た。

何もない荒野に無数の剣が突き刺さった赤い世界……
人の気配もなく、無機質な剣があるだけの世界に風が吹く。

――。

何処からか唄が聞こえた。

悲しくて、切なくて……どこかで聞いた事がある不思議な唄……

鉄と鉄が奏でる旋律。

風が吹く……

――体は■で出来ている。

不意に、無数の剣の先に赤い背中が見えた……

「……………っ、」

日差しが差し込む居間で私は目が覚めた。

学校も休みで一通り家事が一段落したあと、居間で寝てしまっていた様だ。

首を動かし時計を見る、まだ昼を過ぎたばかりだ……

切嗣さんは新都に出向いて居ない。

士郎は、……と身体を起こそうとしたが後ろから呻き声が聞こえてきて振り向いた。

私の兄である士郎は、くうくうと気持ち良さそうに寝ている。

その顔を見て、何故か安堵した……

もう、何回目かわからないが、最近になって同じ夢をよく見る……

あの夢から醒めるたびに酷く不安になる。

それにしても、不思議な夢だ……どこか懐かしく、悲しい世界……

私はあの光景を知らないはずなのに、私はあの世界をあの無数の剣をあの背を……知っている。

これは^{月の聖杯}ムーンセルが所持している記録している何かなのだろうか？

あの夢を見る様になってから日に日に身体の成長に合わせてムーンセルとの繋がり^{リンク}が強まってきている、好調……とまではいかないが徐々にコントロールが出来ている。

だが、無理をすれば酷い頭痛に襲われる、最悪には暴走……

それに切継さんはもしもの時にと緋色の石が付いた紺色の魔力封じのブレスレットをくれた。

因みに士郎も蒼色の石が付いた赤茶色のブレスレットを着用している。

「う……、ん」

士郎の呻き声にハツとし隣を見れば士郎が寝返りしたようだ。

思わず頬が緩み、ムニツと頬を抓る。

柔らかい……プニプニ、餅肌ってこゆうのかな……

クスクスと笑うと肩から垂れている蒼^{そう}が揺れる。
それに気がつき、掴んでみる。

青い少し大きめのリボンのような髪紐を指先に絡めて弄んだ。

数日前の事だ……

晴天の日差しの下、新都に行った時に買ってもらった新しい物干しに洗濯物を干している時、不意に声をかけられ振り返った。
縁側でニコニコしながら手招きする腑抜けた顔をした切嗣さん……

「どうしたの、ボケでもはじまった？お昼はまだだよ。」

「……シロ、あの日の夜からなんか冷たくないか……？」

「そう？普通だけど……で、どうしたのお父さん？」

「髪、伸びたなあ……って」

「髪？」

横髪の一部を摘み前にも持つてゆく。

確かに伸びたな……もう肩をすぎる位まで伸びている……

正直、家事には邪魔だなあ、と思っていたが切らずにそのままにしていた。

切嗣さんから聞くと髪にも魔力を溜めれると聞いたのと、あと土郎に説得され、この前も公園で桜にもつたいたいと言われたので切らずにそのままにしたが、結ぶかしないと家事の邪魔だしなあ、と思っっていると切嗣さんが手招きしている。

こっちにおいでとニツコリ笑うその顔に……不信を抱かせる……仕方なく、洗濯籠を置き背を向けて座る、髪の毛を何回か集めて束ねているようだ……と、束ねた髪を何かに巻き付けている。

「お父さん？」

「もう少し……っと」

キュツと絞まる音にいいよーと嬉しそうな声に首だけで振り替えれば目線の端に青いのが見えた。

「……リボン？」

青い少し大きい長めの髪紐リボン銀色の縁取りに片羽の刺繍がされている。手触りがよく素材からして良い物だろう。

切嗣さんを見上げると眉をひそめて申し訳なさそうにしている……

「いつやらに髪飾りが欲しいって言ってただろ？ほんとに可愛い髪どめがよかったんだけど、中々決まらなくて……」

「それで髪紐に、か……」

「アハハハ……」

力なく笑う切嗣さんに溜め息をつくと身体ごと振り替り抱き着く意外な反応に固まってしまったが気にしないふりをして耳元に口を近付けた。

「ありがとうお父さん、凄く気に入った……大切にするよ」

パツと身体を放すと切嗣さん、真っ赤になつて固まっていた。
いたずらに成功し、籠を片手に髪を揺らし洗面所にかけて行った

その後、訪ねてきた藤姉さんにおそろい、とポニーテールにされた
直後、切嗣さんにシャーレイ…！と泣きながら抱き着かれた……

シャーレイって誰や、と内心突っ込んだのはナイシヨ。

「ん……………」

回想にふけていたが、士郎が目を擦つて薄目でこつちを見ていた。
おはよと口を開くより先に士郎がノロノロとだが手を掴んできた。

「士郎？…どうしたの？」

「ん……………へんなの、みた。」

「へんな？」

「なんか、よくわかんねえけど、……………なんか、」

「なんか……………」

「……………」

「士郎……………」

顔を覗き込むとクー、と再び寝てしまった士郎に脱力してしまう。

「最後までいつてから寝るよな……」

溜め息をつくが、あどけない寝顔に口が緩み、いまだに繋がれた手を絡めて士郎に擦り寄り目を閉じた。

ああ、こんな日がずっと続ければいい。

士郎と切嗣さんが居て、桜と一緒に遊んで、商店街の人々と触れ合い……笑っていれる日々がずっと続ければいいのに……そう、幼い私が抱いた小さな願いは、長くは続かなかった……それを知るのもう少し後のことだ。

夢を見た。

青い水の中で、一人立ち尽くす後ろ姿の黄土色の制服に身を包んだ少女が居た。

何をするでもなく、頭上にある月を眺めながら唄を口遊くちうせんでいる。フツと唄が止まり少女がこちらに気が付いたのか、振り替えた。だが、顔がよく見えなく口元だけが微かだが微笑んでいる。

はじめまして、と口元が動く。

『まさか、アンタがここに来るとは……いや、……アンタは彼なのだから可能か……でも、アンタが彼になるとは……世の中ってわかんないなあー』

？、何を言っているかわからない、……でも、あっちは何か理解し

たのか腕を組んでうんうんと頷いている。
その度に胸元の青いリボンタイが揺れる。

『さて、もっと話していたいけど……それは、出来ないみたいだ…
…』

スツと口元到人指し指を添える。

『此所でのことはナイショだから……』

次第に景色が薄れてきてた。

少女はぎこちなく笑みを浮かべる。

『またね、士郎』

え、なんで俺の名前を……

少女は、手を振って景色と共に白けて消えた。

『次に会う時には『わたし』が誰かわかるはずだよ』

ブツン、とブレイカーを落とした様な音がすると視界は暗黙した。

フツと目を覚ましたが意識はまどろいでいる。

目元を擦ると人の気配に薄目のまま、少し上を向く

白兔がこつちを見つめている……

フツと白兔の手を掴んだ。

口を開いた白兔は不思議そうにしている。

「士郎？…どうしたの？」

「ん……へんなの、みた。」

「へんな？」

「なんか、よくわかんねえけど、……なんか、」

「なんか……？」

へんな人が居た。

そう言いたかったが、眠気に襲われ……再び眠りの中に入っていた。

あの人は誰だったんだろうか……？

思い出そうとしたが、夢の内容はもう何も思い出せない。

ただ、誰かに似ていたような、気がした。

第九話・紅の世界・蒼の世界（後書き）

白兔、ムーンセルの力を徐々に抑えられてきています、情報も流れてきています。

士郎が出会った人は白兔でもあり、白兔ではありません。

この人は、のちに再登場させます。

第十話・月夜での受け継ぎ 約束（前書き）

ここまで했습니다。

急いで書いたので「あれ？」などところがあると思います。
後日直します。

12 / 17 加筆修正

第十話・月夜での受け継ぎ 約束

その日は、月が綺麗な夜だった。

私と土郎と切嗣さんは何をするでもなく、縁側に腰掛け肌寒さ感じる中、月を眺めていた。

あれから、数年……私は11歳になった……

私と土郎は未熟ながらも基礎的な魔術を使いこなせるようになり、中でも土郎は『投影』を特異とする、普通では投影したモノは数分が限度に対し、土郎の投影はずっと維持し壊れないかぎり消えない。ハッキリ言えば、土郎の能力はデタラメ、だ。

まあ……私も人の事は言えない。

私は治癒や防御など補助的な魔術を得意としているが、私は他者に強化をかけることができる

それを聞いた切嗣さんは絶句した、他人に強化をするなど最高難易度だと言われた……

私も他人から見れば、デタラメな分類だろう。

しかも、私はムーンセルと繋がっている。

大体半分位をコントロールできるが、完全に習得するには私の肉体が成人すれば……^{リンク} なんとかなる。

だが現在の繋がりで……半径2kmは消し飛ぶらしい。

常識外れの力に私も切嗣さんも顔が引きつる、土郎は分かってないようだが、直球に『冬木の一部が消える』と答えれば青白くなってブルブル振えて涙目で首を振る。

さて、話は戻る。

切嗣さんは家を開ける事が少なくなり、大半は家に居るようになった……

藤姉さんは嬉しそうだし、士郎も隠しているつもりだったみたいだが嬉しそうだった……けど、対する切嗣さんは何処か諦めた様な目をしていた……

日に日に、体調が悪くなる切嗣さん。

あまりの異常に問い詰めると、困った様に笑って答えてくれた。

切嗣さんの身体は、この世全ての悪の呪いを受け、徐々に身体を侵蝕している。

それを知って私は絶望し、必死に試行錯誤を繰り返し思い付いたのは、ムーンスセルの能力を使えば、寿命を延ばせると……だが、切嗣さんは首を横に振った。

『これは、僕の罰なんだ……だから、この罰は僕が持っていないからね』

そう言つて、微笑む切嗣さん……その笑顔に私は泣いた。

ボロボロ泣き出した私に戸惑った様だった切嗣さんは頭を撫でてくれた。

ゴメンね、ありがとうと繰り返し言っただ。

その言葉にまた涙が溢れ出した。

その後、切嗣さんは士郎に聖杯の事と火災の事を話した。

自分のせいで士郎を壊してしまったと苦痛が滲んだ顔をしたが、士郎はそれを許した。

『じいさんが全部悪いわけじゃない、それに誰がじいさんを責めようが、俺はじいさんのやったことを許すよ……だって、じいさんが

いなかったら俺もしろつも助からなかったし、むしろ感謝しているよ」

その後になうだよ、と頷く私に今度は切嗣さんが私らを抱き締めてボロボロと泣き出した。

それから、徐々に弱っていく切嗣さんを手助けをしながらも日々を過ごしていたが……

そんな冬のある日、ご飯を終えたころ切嗣さんは口を開いた。そして、今に至る。

腕を組んで月を眺める切嗣さんの両脇に私と士郎が座っている。目に見えて切嗣さんに死期が見えている。

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた。」

突然と呟かれたその言葉に二人して切嗣さんを見上げる。

「正義の味方……？」

「何だよ、それ。憧れてたって、諦めたのかよ。」

士郎はにわかに不機嫌な顔になる。

正義の味方……その夢の為に生涯をかけ、機械のようになった男が目指した夢……

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなこと、もっと早くに気がつけばよかった」

それは、切嗣さんの自嘲と後悔。
妻を失い、士郎から家族や友を奪った自分の罪……

「そっか、それじゃしょうがないな」

「そうだね、大人になっちゃったお父さんにはしょうがないね」
「まったくだよ、本当に、しょうがない」

切嗣さんが月を見上げれば吊られて私達も見上げる。

……本当に綺麗な月だ。

切嗣さんはきつとあと僅かだろう、だから……最後にと自分の夢を話した。

夢を叶えられなかった男の夢はここで終わる……訳はないか。

「うん、しょうがないから俺が代わりになってやるよ」

ほら、やっぱり……

士郎はまっすぐな目で切嗣さんを見つめる。

「士郎、一人で抜け駆けするの？」

「え、いや……そうじゃないけど……えっと、俺『ら』なっ」

「シロ……？まさか、君まで、」

呆然とする切嗣さん、反対側から士郎が切嗣さんの手を握る。

「じいさんは大人だからもう無理だけど、俺らなら大丈夫だろ、任せろって、じいさんの事を助けられなかったけど……これからは、俺がじいさんの代わりに沢山の友達を助けるよ、大丈夫……じいさんの夢は俺がちゃんと現実にしてやる」

「うん……まだ、私達は子供だけど、必ずお父さんの守りたかったモノも守ってみせるよ。」
「——ッ」

絶句した様子だった切嗣さんだったが、やがて安堵した様子に、その顔は安らいだ顔をしていた。

「そうか、ああ……安心した」

でも、と続ける切嗣さんは私達を抱き締めた。

「じいさん？」

「お父さん？」

「……——ッ」

ギュッと抱き締めるやせ細った腕に力が籠る。

「約束してくれ、無理はしないと……そして、——」

幸せになってくれ。

そう呟くと押し黙ってしまった切嗣さんに私達は背に手を伸ばし抱き締めあった。
。

その数日後、切嗣さんは眠った。

「
……………」
「
……………」

切嗣さんの葬式を終え、私達は縁側に座ってあの時の様に月を眺めていた。

違うのは間に人が居ない変わりにお互いの手を握っている。

さっきまで居間の方では居眠りをしていた藤姉さんが居たが家の人に迎えに来て帰ったとこだ。

葬式の間、藤姉さんは私達の手を握り締めていた……それは痛いくらいに

でも、私達は何も言わなかった。

藤姉さんはずっと泣くのを耐えていた……けど、大丈夫だよと握り返すことは出来なかった。

それ程までに、自分の小ささに少し恨んだ。

屋敷はこのまま藤村家が管理し私達は無駄に広い屋敷が残された。

「月、綺麗だね。」

「ああ……………」

会話はそれだけだった。

チラッと盗み見すれば、土郎の瞳には決意の色が見えた。

土郎はきつと『正義の味方』になる。

……つまり、いつか土郎は切嗣さんみたいに……………いや、それ以上

に慟哭し絶望するだろう……そして、 ■■■■の様に裏切られ…

………？

あれ？

いま、なんて言った？

何が裏切られるって…？

頭が痛い、吐き気がする。

「しろっ？」

ハッとすると士郎がこっちを見ている。

「ご、ごめん……考え事してた……何か言った？」

「……俺、さ。じいさんの目指した夢、叶えてやりたいんだ。」

「……正義の味方に？」

「ああ、それがどんなに辛いものかわからないけど……じいさんの夢は俺が叶えてやりたいんだ。」

「……そっか。」

「ああ……」

士郎の決意は今更変えられない……だから、

「ねえ、士郎……」

「んっ？」

ギョツと握り締めると士郎は不思議そうに首を傾げる。

「士郎が”正義の味方”になることは止めない、けど……士郎の身に何か起きたら泣く人がいることを忘れないで」
「えっ？」

「それに……士郎は私を守ってくれるみたいだけど、悪いけど……私、守られるだけなんて嫌だよ。だから、」

——私も戦うよ。

士郎は少し驚いた様だがうんと頷く。

「一緒にか」

「そう、一緒……」

——私は、士郎を守る。

士郎が誰かの為に剣（けん）を握るなら、私は誰か（大切な人）の為に盾になろう。

その決意は、やがて私の起源になる。

その日、私と士郎は一緒に眠った。

「……………」

懐かしい夢を見た。

五年前……丁度じいさんが死んで妹と広い屋敷に残された後、月夜の下で二人で

約束した時の夢を見た……

布団を畳み、部屋を出る。

暖かい日差しが屋敷中を明るく照らす。

縁側から庭を覗けば、こげ茶色の長髪を青い髪紐^{リボン}で結んだ後ろ姿。
洗濯物を干す度に髪紐が揺れる。

「白兔」

名を呼べば振り返り……

「おはよう、士郎……今日は遅かったね」

琥珀色の瞳が俺を写し、微笑む。

第十話・月夜での受け継ぎ 約束（後書き）

なんとか、一段落です…。

眠いよ…

第十一話・戦い前の穏やかさ（前書き）

本編までもうちよ…！

寒くて指が動かない… orz

第十一話・戦い前の穏やかさ

久しぶりに昔の夢を見た。

切嗣さんが亡くなった後日に士郎と交わした約束……もう五年もたつ……

少年から青年に成長する士郎は、あの日の約束をまだ覚えているだろうか……

いや、もし忘れていたとしても私の中にある決意は揺らがない。

一度だけ深呼吸をし、いきよいよく起き上がるとベッドを降り寝間着を脱ぐ。

下着を身に着け、赤で襟と袖口を縁取りされたシャツを着、黒いタイツに黒い膝位のスカート履くと黄土色のベストを着ると金色の縁取りのリボンを結ぶ。

よし、と裾などの確認すると机に置いてある髪紐を手に部屋を出た冬の寒さで冷える廊下を歩き、洗面所に向かう。

すっかり習慣ついた手つきで洗濯物を分けて洗濯機を回すと次に自分を整える為、洗面台の前に立ち、顔を洗い、櫛で髪を解くと纏めて髪紐で結ぶ。

頭を上げて、鏡に写った姿を見る。

目の前に居るのはあの時と同じ姿をした『私』が居た、だが若干……違うところもある、こげ茶色の瞳は琥珀色に髪も腰辺りまで伸ばし髪紐で結んでいる

何より違うのは今身に着けている制服。

黄土色のブレザーとスカートに青いリボンの月海原学園の制服

ではなく、白と赤のシャツ、黒いスカート、黄土色のベスト、赤と金色のリボンタイと様々な色を使った穂村原学園ほむらはらの制服。

もう時期この制服を着るのも一年たつ……密かだが意外に気に入っていて鏡に向かってスカートを摘んで回ってみるがハツとし自分の行動に赤面する。

馬鹿か私。

パンツとスカートを叩くと洗面所を出る。

愛用の青地のエプロンを着用し、流し台に立つ。

切嗣さんが居た頃にいつの間にか早い者勝ちだった朝の争いも、週交替という形で静かに収まった。

朝食の仕度をしていると、廊下からの足音に包丁の握る手を止めるが直ぐに動かす。

この家には、私と兄、士郎しかいないがこの家には外から訪ねてくる人が二人も居る。

足音からして誰かわかり、口元を緩める。

ガラスと襖を開ける音に振り返ると私と同じ制服姿の藤色の髪にリボンを結んだ少女に向かって笑いかける。

「おはよう、シロちゃん」

「おはよ、桜」

間桐桜、私の幼馴染みで今や親友とも呼べる仲。

桜は毎朝と晩に衛宮家に来ては料理を作って一緒に食べている、随分前に士郎が怪我をして家事が出来なく、私もバイト等で看護が出来ない時に桜が家に来たのが発端だった。

「今日はホウレン草の御浸しにキンピラゴボウにしようと思うんだ

けど、他に何がいいかな？」

「そうだなあ……」

愛用のピンクの桜柄のエプロンを着用しながら台所に入ってきた桜に尋ねれば、

焼き魚はどうか？と冷蔵庫を開ける。

「あ、鮭があつたよ」

「じゃ、焼いといってくれる？」

はい、と返事をし焼く準備をしている横で時計を見ると、洗濯が出来ている頃だとエプロンを外す。

「火、見てて。小鍋には味噌汁が出来てるから。」

わかった、と返事をする桜に任せて洗面所に向かう。

縁側から洗濯籠を手に庭に出る。

まだ肌寒い風に身震いし洗濯物を干していると背後……縁側らへんから気配を感じ取るが正体は分かっているから洗濯物を次々干していると背後から名を呼ばれ振り返る。

赤茶の髪に琥珀色の瞳……まだ幼さが抜けきれていない兄、士郎に微笑む。

「おはよう、士郎……今日は遅かったね」

「ん、おはよう」

今日も新たな一日が始る。

今日は、白米に豆腐と大根の味噌汁、ホウレン草のおひたし、キンピラゴボウ、
ダシ巻き卵、焼き魚、納豆、焼き海苔
和風の朝食を机に四つずつ並べて、私はヤカンに入ったお湯を急須に入れる。

そして、第二の来訪者を待つ事数十秒……

ドタドタッ……

ガラッ

「おっはよ——うっ！」

短い髪を振りかざし現れたのは今やお馴染みの藤姉さんだった。

「おはよう、ふじねえ」

「おはようございます、藤村先生」

「おはよう、藤姉さん」

「おう、おはようだせっ！」

ビシッと親指を立てニッと笑うと自分の虎柄のお茶碗の置かれた席に座る。

「わーい、白兔ちゃんの朝ご飯だあー♪ いったき——」

「藤姉さん、皆が席に着いてからだから先に食べないでね」

「うっ……はあーい。」

箸を持って先に食べようとした藤姉さんに釘をさしお茶を四つ分用意し席に着く

。

因みに私が藤姉さんの横に座っているから対となった前の席には士郎と桜が……

士郎は普段通りだが桜は少し頬が赤い。

目に見えて分かる、淡い恋心に気がつかない士郎に少し怒りを覚える。

「じゃ、いただきます。」

「「「いただきます（ゝ）す。」」」

「あ、今日のお味噌汁なんかいつもと違う……」

「あ、わかる？いつも使っている鰹節が切れちゃって煮干しと昆布でダシを取ったんだ。」

「それなら、私が買ってくるよ、白兔今日バイトでしょ？」

「ありがとうね、桜」

いーえ、と笑う桜

桜は人前では私を「白兔」と呼ぶが二人の時は「シロちゃん」と呼ぶ。

まあ、区別しなくていいとは言ったんだが……本人はさせてほしいと言ってたから……なんか、納得できないまま承諾してしまった。

「あ、それなら士郎も連れってて明日から士郎の番だから献立とか考えないといけないし」

「そうだな、桜はそれでいいか？」

「は、はいっ！」

桜の方を見て訪ねる士郎に赤くなってしまっ桜は私を睨むが知らぬふりして藤姉さんの空になったお茶碗にご飯をよそる。

「シロちゃん、わざとでしょ」

「ん？何が？」

朝ごはんを終え、藤姉さんは先に出て、朝練のある私と桜は後片付けを士郎に任せて家を出た道中にムツとする桜にニヤリと惚けたふりをした。

「朝ごはんの時、わざと先輩に行かせる様に仕組んだでしょ」

「え、そんなことないよ。明日から士郎が当番なのはホントだし買い出しに行かないといけなかったし、明日からは士郎と朝ごはんの仕度するから二人で決めた方がいいじゃんか」

「ムツ、そうだけど」

納得していない桜にクスクスと笑うが、ハッと気がつき眉を潜めた。

「桜、寒くないの？」

紺色のダッフルコートにマフラーと手袋をつけている私に対して、桜は防寒具なしの制服だけだ、まだ寒い冬に薄着で寒くない訳がないが桜は大丈夫だよ、と笑うがそんな桜に自分のマフラーをかける。

「嘘つけ、身体すごく冷たい……まったく、我慢強いというか意地っ張りというか……桜は女の子なんだから冷やしたらダメだろ、よし」

「あ、ありがとう」

「どーいたしまして、明日からはちゃんと防寒具を身につけること、しなかったら……お腹プニプニの刑ね。」

ニヤリと怪しく笑い手をワキワキとすればいやゝと桜は悲鳴を上げ姿にクスクスと笑う。

第十一話・戦い前の穏やかさ（後書き）

白兔、16になりました。

髪型はリリなの的美由紀さんと同じようにリボンで結んでいます。

次かその次に赤セイバーを出します！！　オラワクワクシテクタ！
！

番外編 ある喫茶店の一時・・・（前書き）

今回は、白兎のバイト先のオリキャラを出します。

番外編 ある喫茶店の一時・・・

「ありがとうございます。」

会釈をし女性二人が扉から出ていくのを見送った白兎は、ふうとため息をつく。

「アルフさん、今のが最後のお客さんで良いんですね？」

「ああ、シロウ君ありがとう。」

ニツコリ微笑む髪を少し上げた黒髪に青い瞳の初老の男性。

白兎のバイト先の喫茶店「Utopia^{ユートピア}」の店主であるアルフレッド・

クラウドは労いかカウンターまで手招きしティーカップを三つ並べる。

「まだ時間あるし一杯どうだい？」

「いただきますっ」

バイトの終わる時間までに猶予があるとアルフレッドは度々こうしてお茶を淹れてくれるため、白兎は嬉しそうにカウンターに足を運びシワにならないようスカートを気にしながらカウンター席に腰かけるとアルフレッドの紅茶を淹れるのを眺める。

「そう言えば、もうじきシロウ君も二年生だよね……早いものだよ、君が初めて店^{ミナ}に来たのが昨日のようだよ。」

「何いつているんですか、老化が遂にきましたか？」

「おや、言うようになったな小娘がっ！」

染々と言つとニヤ、と白兎がいたずらっぽく言えばアルフレッドは怒ったように言い返すと二人してクスクス笑う。しばらくするとティーカップに紅茶を注ぐ。

「それに、シロウ君のその制服も見慣れたしね。」
「うっ」

お返しとばかりにアルフレッドは白兎の今の服装をネタに話はじめた。

「初めはあんなに嫌そうだったけど……うん、やっぱり今更だけどよく似合うよ」

「……まあ、半年も着てれば慣れるよ」

はあ、と紅茶を一口飲みスカートを摘まむ。
裾の長い黒いワンピースに白のフリルのエプロンにカチューシャという、一般的にいうメイド服を作業服として着ている。

「ほんとほドルドルさんみたいな服装が良かったんだけど……働かせてお金をもらっている身としては、仕方ないですしね……あれ、そう言えばドルドルさんは？」

「ルディなら、砂糖が少ないから買いにいつてくるって」
「へっ……」

紅茶を飲み干し空になったティーカップをソーサーに置くと同時に扉が開き付いたベルが鳴る。

入っていたのは、紺色の髪を耳まで無造作に短く襟足だけ長い（分かりますと言えばウルフカット）

伏せ気味の緋と蒼のオッドアイを持つウェイターの服を着た女性にアルフレッドと白兎はおかえりとニッコリ微笑むとコクンと頷く。

彼女の名は、先ほど出た名の本人であるルドルフ。

白兎の先輩であり、男装を好んで着る、実は白兎が着ているメイド服は元は彼女の다가一度も袖を通していない。

ルドルフはカウンターに買い物袋を置き、踵を返したがアルフレッドがルデイ、

と呼ぶと不機嫌そうな無表情で振り返ると白兎の隣の席に手のつけてないティーカップを置く。

目だけでアルフレッドの行動を見ていたが次に出されたものに微弱な反応する。

「今日の新作、苺&苺クリームのタルト、ミルクレープ、オペラ、フルーツタルト、ザッハトルテ、ブリュレ、ティラミス……の八種類のプチガトー（プチケーキ）があるんだけど……試食頼めるかい？」

ニツコリ微笑むアルフレッドに対し無表情のルドルフだが、洪々とどこか嬉しそうな雰囲気ですぐに席に着くとプチガトーを頬張るとおいしい、と小さく呟く声に二人して笑う。

ルドルフは無表情無口で寡黙な為、近寄りがたく極めて親しい仲でしか彼女の感情は読み取るには難しい。

「さて、アルフさん私そろそろ失礼します。」

「おや、もうそんな時間かい？明日もよろしくね、後、お兄さんにたまにはおいでと言っといてくれないか？」

「はい、わかりました」

席を立ち会釈をすると裏方に向かう後ろ姿にアルフレッドがお疲れ様と言うと白兎もお疲れ様ですと答えて戸の向こう側に去っていった。

番外編 ある喫茶店の一時・・・（後書き）

はい、白兔の他に二人オリキャラを出しました。
因みに白兔のメイド服は、マジキュー4コマ2から取っています。
ちよつとしたキャラ設定。

アルフレッド・クラウド

身長：168cm / 体重：59kg

白兔のバイト先の喫茶店「ユートピアUtopia」のマスター。

穏和な性格でいつも笑顔を絶さない紳士的だが怒ると怖い。
人生相談どんと来いな精神。

お菓子作りが得意で暇さえあれば新作を作っている。

英国生まれの黒髪に青い瞳をしている。

ルドルフ

身長：175cm・体重：53kg

スリーサイズ：81 / 60 / 78

白兔の先輩であるウェイターの女性。

無表情無口でめったに喋らない、アルフレッドのお菓子が好物。
紺色の髪に緋と蒼のオッドアイ

店は、商店街の少し外れにあるアンティークな喫茶店です。
ケーキと紅茶の美味しい隠れ名店となっています。

番外編 あけおめ（前書き）

ナチュラルに赤セイバーがいます。

番外編 あけおめ

「突然ですが、あけましておめでとうございます。今年も頑張って投稿をやってゆきます……と、作者からのお言葉です。」

「うむ、あけおめだな奏者よ。」

「うん、セイバーもあけましておめでとう」

「しかし何故突然と豪華な料理やキモノを着る必要があるのだ？」

「うーん……詳しく話せば長くなるからなあ……これはね新しい年を祝う行事で、お正月って言うのお正月はお節を食べたり、初詣……あ、神様に今年一年健やかに過ごせますようにお祈りいろんな事をするの」

「ほお……なかなか面白い行事だな……しかし、このキモノって言うのは動きにくいな。」

「そうだね、でも着物は日本の伝統衣装だから今日だけ我慢して、それによく似合っているよ。」

「そうか……？奏者がそう言うなら……仕方あるまい、それに余としても奏者のキモノ姿はまだ見ていたい。」

「ありがとうセイバー……さて、話は変わりますが、この小説の今後の進行について、今のところ次回または次の回にセイバーが登場となります」

「やつとだな……まったく、ようやく奏者との再開ができるのか。」

「やつとだよな、まったく作者はなにしてんだろうな……因みに作者からの一言は『ごめんなさい。』と……」

「簡素な一言だな。」

「まあね、……気を取り直して、今後の進行について、セイバー」「うむ、作者の想像では、大体の展開は、初盤はFate風で中盤はUBWとHF混じりで終盤はUBWとオリジナル混じりの予定とのことだ。まあ、変更する可能性もある……何せ作者は気分屋なものでな」

「後、CPは、弓剣、凜↓土↑桜です。」

「待つのだ奏者っ！余と奏者のラブストーリーはっ！？」

「へっ？……あー、うん……あるよ、ちよつとだけ、かなっ？」

「ちよつとだけだと……！？……まあ、よい……可能性があるならそれを生かす

殺すも余次第だっ！覚悟しておけ奏者よ。」

「はいはい……あれ、ところで、他のメンツはどうしたのかな……？」

「それなら、酒に酔った遠坂と間桐の女が奏者の兄を引きずって部屋に行ったぞ？なんでもヒメハジメだそうだ。」

「なん、だと……？」

「青セイバーもアーチャーを連れて部屋に閉じ籠ってしまつて、ライダーも初詣に行くとしていったぞ」

「へー……そうなんだ。」

「奏者……？魔力放出してどうしたのだ……？」

「いや、べつにつゝ？私の名に『兎』が入っているからって勝手に司会にされて言い出しっぺの凜や桜がさっさとやりたいことやりに行きやだつたのとかその他諸々のことなんか全然怒ってないし、いやホントに。」

「そんな黒いオーラ出されて笑顔で言われても怒ったようにしか見えんぞ。」

「よし、士郎とここに乱入し三人まとめて頂こう……あ、アーチャーとこは放置」

「ヒメハジメに乱入するのか、よし開幕だ、行くぞ奏者よ！」

番外編 あけおめ（後書き）

あけおめ！今年も頑張ります！！

ちなみに、赤セイバーと白兔の着物は、
赤セイバーが紅で白兔は青と白の着物です。

第十二話・戦い前の穏やか？（前書き）

慎二が不憫です。

第十二話・戦い前の穏やか？

穂群原学園弓道場。

弓道着を着た、焦げ茶の髪を青の髪紐で結んだ少女は射場で的に向き合い姿勢を整える、

音が無くなる。シン、とした中、少女は手に持つ弓の矢摺やすりこ籐に矢を番える張り詰めた弦を引き――

弦を離して的に穿つ。

放たれた矢は的に中心に突き刺さった。

「さっすが、期待の一年だね。」

そう声を上げたのは弓道部の部長の美綴綾子だ。

射た少女――白兔は、大袈裟ですよと困った様に答える。

それを見ていた桜が近づいてきてどうしたんですか、と尋ねれば綾子はさっきの会話を話すと白兔はそれを言うなら桜も期待の一年だよ、と言うと桜も大袈裟だよ、と答えた。

朝練を終えると、桜と二人で教室に向かうと途中、向かい側の廊下を歩いてくる黒髪をツインテールにした少女に桜はあ、と足を止めた。

白兔は立ち止まった桜を振り替えり、横目で前方を目をやる。

黒髪のツインテールの少女は、こちらに気づいていなかったのか階段を登って行ってしまった。

白兔の脳裏に同じ黒髪にツインテールの少女が浮かんだ……………

違う。

そうだ、あの子とあの子は別人。

自分の知るあの子はるか先の人。

だが、あの子を見ると酷く胸が苦しく掻き立てられるようだ。

闘いに乱入し酷く怒られたが、何も出来ず戸惑っていた自分に手を貸してくれ、

最後まで一緒に居てくれた優しい赤い少女……

無駄な雑念を払い白兔は桜と共に教室に向かった。

授業を終え放課後の部活を終え帰る支度をしている最中に、背後から桜と呼ばれる声に振り返った桜は表情を変えた。

「兄さん……」

呼ばれた先に居たのは一つ上の兄、間桐慎二。

弓道部の副部長であり士郎の友人

慎二は桜に近づくと今日の掃除当番代われと言い出す。

それに対して桜は眉を顰める。

「あの、今日は、先輩と……」

「はあ？なんでアイツが出てくるんだよ、いつも飽きずに衛宮とこ行ってさあ」

つらつらと文句を言っていると、何処からか寒い冷氣に弓道部に居る部員は、ハッとし真っ青になると壁に引き付く、その中で綾子はやれやれと、慎二に哀れみを含め合掌した。

その慎二の背後に近寄る影にいまだに気がつかない当の本人、肩越

しに気がついた桜だったが、口元に指を立ててしっ……とするのを見て内心苦笑する。

「桜、聞いてんのかよっ」

「あれ、間桐さんじゃ、ありませんか」

「ひいっ!？」

素早く振り替えると真後ろにこやかにこんにちは?と挨拶をする焦げ茶の髪の少女、白兔だが、慎二の脳裏に蘇る過去の数々のトラウマが知らずに後ずさる……

「今日はどうかしました?今日は掃除当番でしたよね……まさか、桜に任せてサボリ?ダメですよちゃんと役割分担してあるのですから、副部長であるアナタがちゃんとやらないといけないでしょ?」

にこやかに笑っているが纏っているオーラは真っ黒クロスケでそこから除く赤い二つの光が慎二を睨み付けている。

余談だが、過去に慎二は白兔から怒りをかっている。

過去に桜に暴行をしたと知ると慎二に飛び蹴り+回し蹴り(制服姿)を喰らわした。

追い討ちをかけるかのように、一言。

「今度やったら、もぎるぞ」と親指を立て下に向けて言い残して去る。

その場に居た証言者は口を揃えて言う。

『魔王が憑依したようだった』っ。

「さ、桜。士郎が待つてるから行く。間桐さん、掃除ちゃんとやるんですよ、さよなら。」

「あ、白兔……待つてよ。」

横をすり抜けて桜に微笑み、弓道場を後にしようとしている二人に慎二が舌打ちをしたが、それが聞こえたのか白兔がニッコリ笑い振り替えると慎二だけに聞こ

えるよう近寄ると……「桜に何かしてみろ、お前のを潰すぞ、ワカメ。」とゴキツと拳を作る動作をすると慎二は真っ青になるが、知らぬふりして数歩離れて「先輩なんですから後輩にお手本になるようお願いしますね」と会釈をして去る白兔。

その後ろ姿に綾子は合掌しながらも内心では笑っていた。

第十二話・戦い前の穏やか？（後書き）

私、慎二好きですよ？色んな意味で

白兔にとって桜は親友であり家族の一人でもあるので「守る」べき存在です。

赤セイバーは次回に必ず出しますっ！！

第十三話・予感。（前書き）

後半に白鬼の扱うことになる武器？が出ます。

第十三話・予感。

夕食を終え、桜はそろそろ失礼しますと席を立つ。

それに白兔は透かさず立ち上がり途中まで送るよとコートを取りに部屋に向かった。

「シロちゃん」

「ん？なに」

隣を歩く桜の方を向けば困ったような顔をする桜に首を傾げる。

「どうした…？」

「えっと、あのね夕方ありがとうね。」

「夕方……？」

あ、部活後のかとポン、と手を鳴らす。

まあ、約束はこつちが先だったしそれに間桐さんはサボリ魔だしビシッと言っておかないとね、と答えるばクスッと笑う。

「兄さん、シロちゃんには勝てないよね」

「そうかな？」

まあ、『いちよ』は友人だったから何となく扱いには慣れているしと内心で呟く。

それを言えば、とムツと顰めっ面で桜を睨む。

「それはそうと桜、アンタはもう少し積極的にならないとダメだよ。」

「えっ」

いきなり自分に指差しされ困惑する桜に白兔は続ける。

「今日は私が居たから強制的だったけど断ること事が出来たけど、私や士郎が居ないときに桜自身が断らないといくないんだから、それに、桜はさ……もう少しは自分に自信を持った方がいいよ？桜は良いとこ沢山あるんだから料理上手いし、弓道も上手い、優しいし何より桜は人を元気づける何かがあるんだし頑張ればなんだってできるんだよ。」

「そう、かな？」

「そうだよ、料理も上達したのも桜が頑張ったからだよ。でもだからって急ぐ必要はないよ？桜なりのペースで頑張りな。それにさ、……桜は一人じゃないんだから、困った事があつたら最低限でも協力すし、助けて欲しい時は手をさしのべるから、ね。」

暫く沈黙が続いたが桜は口を開き、聞いていいかな、と俯きながら問いかける。

「もしもだよ、……誰かに、強制的に、何かを押し付けられたら……どうすればいい、かな？」

戸惑いながらも問いかける桜に少し考える。

その目の端から見える微かに振るえる手を見て白兔はその手を握る。そんなの決まってるじゃんかと笑う。

「そんなの断れ。そんなの無理って言え。桜の言う何かってわからないけど、それは桜を傷つけるのなら私は黙ってはいない……けど、その前に桜が頑張ってる断り続けないとダメだぞ、それに断ることも

一つの勇気なんだから、ちゃんと自分の意思を貫きな、でも、それでもダメだったら私らが手助けするよ。」

ねっ、と微笑むと桜はうんと頷くと二人して笑い合う。

十字路のところで桜はここまででいいよと、言うところとわかったと頷くがフツと夕方のことで桜の兄とその祖父に何か言われるんじゃないかと桜の手をつかむ。

「間桐さん夕方のことで何か言ってくるかもしれないから、何かあったらすぐに連絡しなよっ！明日、私が間桐さんにきつく叱つくから、あ、お爺さんも同様だからね、何かされたら一発喝しとくから」

にこやかに笑っているが今いったことを副音声にすると『あの海草野郎をぶっ殺してやるし、あのクソジジイは塵も残さず滅してやる』と聞こえそうなくらいだ。

しかし、桜は単純に心配してくれていると思いわかってるよと握り返すと、じゃあねと手をふって駆け足で去って行った。

桜の姿が見えなくなると家に帰ろうと踵を返した瞬間、一瞬で悍ましい程の魔力を感じ振り返った。

なんだ、と嫌な予感を感じ急いで家に帰った。

すっかり夜は更け時計の針は12と2をさす頃、白兔は自室の隣に設けた自身の工房に鞘に差した刀を手に床に描かれた魔方阵の中心に居た。

桜を見送った後に感じ取った膨大な魔力……まさかと思い。

冬木の地脈を調べることにした、本来地脈を調べれるのは冬木の管理者だけだ、

下手をすれば管理者に気づれるだろう。

だが、先から胸にある不安を取り除くにはこれしかないと目を閉じ息をする。

「……よし。」

カチャ、と手に持つ鞘から刀を抜く。

抜かれた刀身は黒く鍔と柄の間には灰色の珠が埋め込まれてある。鞘を床におき、刀に呼びかける。

「――、起動開始。」

白兔の呼びかけに灰色の珠に朱が灯ると刀身に脈打つ様に赤い循環する。

「始めるぞ。」

そう、白兔は刀に告げると珠に灯る朱が輝く。

第十三話・予感。（後書き）

黒い刀身の刀についてはまだあかせませんが、この刀は特殊で殺傷も低く白兔曰く鈍刀。なまくら

長くなつたので一旦切ります。

第十四話・前兆、そして召喚（サイカイ）

「——
コネクション・オン
接続開始」

「我は器、我は水、我は汝に融き地に染み渡る。」

ポウツと床の魔方陣が微かに灯る。

刀を床に突き付け、「結べ」と呟けば灰色の珠が光る。

「我は器、我は水、我は汝に融き地に染み渡る。——
深淵^{ふかく}へ、——深玄^{しんげん}の奥深く……」
深奥^{ふかく}へ、

意識を集中し、身体だけを残し意識体のみで地に溶け込むイメージ
し下に下に下がって行き地脈に触れる……

ドクン、

「——ッ！」

身体中を走る魔力、持っていられるっ！と咄嗟に刀から手を離すと
支えをなくした刀は床に転がる。

ハッ、ハッと乱れた息を整える最中、身体中を走り抜けた酷似した
魔力に胸の不安は倍増した。

知っている。

私はこれを知っている。

今、自身と繋がっている月の杯と同等の魔力。

そうだ、これは……

「せい、はい……」

あの予感はこれだったのかと頭を抱える、冬木の地に眠る聖杯が起動した。

しかし、何故。

あの人の話では六十年に一度の筈、しかしまだ十年しか立っていない。

頭を回転させ、考える。

あの人の話では、第四回目は中途半端のままで終わったと……つまり、これは四回目のやり直し。

そのやり直しは第五回目として自分^今に回ってきた……

白兎は不安に押し潰され、困惑したまま、身体を丸めた。

まだ自分には力が足りない。

大半は制御出来るようになった力もまだ未完のままだ……

守れない。

このままだと自分の守り抜きたいものたちが居なくなってしまう。

どうするればいい？

どうやればいい？

どう生き残れば……私一人じゃ………？

『一人』？

違うだろ、と誰かが言う。

そうだったと白兎は自嘲気味に自分に苦笑した。

『拳を握れ、』

どこからか、懐かしい声がした。

ずっと前ばかり見ていたせいかな未熟だったころ、隣に立っていて

くれたあの娘を忘れてしまつところだった。

『顔を上げよ！』

ゴン、と拳を頭にぶつけ罰すると立ち上がり、見えもしない強大な魔力を宿した杯に向かって胸をはる、あの娘に恥じぬよう強く。

それと、忘れててごめんと胸に手をおき謝ると、立ち上がると投げ出されていた刀の刀身を撫でる。

『命運は尽きぬ！』

そうだ、まだ始まっていない。

『なぜなら、』

それは、

「『私達ノそなたの運命は今始まるのだから！』」

懐かしい声に合わせて言の葉を口にすれば、白兔の言葉に刀の珠は微かに光る。

月が高々く上がった夜、再び自身の工房の魔方陣の中心に居る白兔手には何も持たず、深く深呼吸をする。

これより、月の杯で共にした少女を召喚する。

と言つても、冬木の聖杯からではなく自身と繋がっている月の杯から召喚を行う。

繋がりを辿つての手探り状態だが、物は試しだと意気込む。

時間を確認し、短い針は2をさしている。

「（そういや、少し前にどっからか魔力反応を感じたけど……誰かがサーヴァントを召喚したってことか）」

急がないと、と焦る気持ちを鎮める。

「コネクション・オン
——接続開始。」

「ユーザ：ロクインチェンジ ユーザー：ムーンセル
——接続状態変更、月の杯に転移。」

ホウン、と瞳が琥珀から海のように青い不思議な色に変わる。
白兔が月の杯ムーンセルにリンクするたびに瞳の色が変わり、身に帯びた魔力も変わる。

スツと手を前にした口を開く。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。我は汝と同じき杯を抱きし者なり。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る
三叉路は循環せよ

閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我に、汝の剣は我が手に

聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば応えよ！

誓いを此処に、我は常世総ての善と成る者！ 我は常世総ての悪を敷く者——！

汝 三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たりし 天秤の守り手よ——

今こそ、我が月輪げつりんの水面みなもに浮かびし深淵しんえんに誘い導きたまえっ！」

魔方阵が輝き、視界を白く染めると月の聖杯ムーンセルの繋がりが強くなる。次に感じたのは、肌を感じた水の感覚——、上に上に上がって行き。

水面に出る。

そこで、閉じていた目を開く。

目の前にあるのは、三つの巨大なステンドグラス。そこで、白兔は懐かしい感覚にフツと笑みを零す。手を前にし、中心のステンドグラスに向かって叫ぶ。

「——告げる！

汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！

聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら、

——我に従え！ ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！

我は観測の月を宿し者なり、汝、赤き剣しるぎを持ちいて、我が前に現れてよ。」

パリン、と真ん中のステンドグラスを残し、割れる二つのステンドグラス。

そして、現れた真紅の衣を纏った一人の少女。
金色の絹の様な髪を靡かせ振り返れば、翡翠の瞳が白兔を映す。

「——問おう。答えよ、そなたが余の奏者か？」

ニヤリ、と美しい顔で笑う真紅の少女に白兔はムツとしたがクスクスと笑う。

ほんと、素直じゃないなぁと内心で思い。
少女に手を伸ばす。

「そうだよ、私が貴女のマスターだよ。」

遅れてごめん、迎えに来たよ。

私の唯一の剣。

第十四話・前兆、そして召喚（サイカイ）（後書き）

やっと、出てきた！！

赤セイバー！！

やった——！！

セイバー召喚できたので、これで少しは投稿が早くなるかもそれません。

刀についてはいずれ話の中でいたしますので、保留しといてください。

第十五話・サイカイ。(前書き)

百合要素あり。

第十五話・サイカイ。

チュンチュン、と雀の囀ずりに目が覚める。

枕元の目覚ましを手に取り見るといつも起きる時間を少し過ぎた所だ、色々あつて寝る時間は遅くなったが起きる時間は身にしみついているようで白兎は俯せの体勢から起き上がりふわぁ、と欠伸をする。

「目が覚めたか。」

どこからか突然と聞こえた声に白兎は驚くこともなく、うんと目を擦りベッド横に向かって口許を緩める。

「おはよう、セイバー」

「うむ、よい朝だ。」

突然と何もない空間から真紅の衣装ドレスを纏った金髪に翡翠の瞳を持つ美少女が現れ満足げに頷く、かつて月面での戦いで共に過ごした白兎の剣剣であるセイバー！。

時は遡り、

ステンドグラスの間に立つ白兎とセイバー！。

セイバーに向かって伸ばされた手に一瞬泣きそうに顔をしかめるがすぐにキリツと顔を上げるセイバーは口を開いた。

「まだ言葉少ないが、久々の再会に免じてよしとしよう……では、改め、—— 契約は成立した。」

ズキツと左手の甲が痛む。

腕をあげて見てみれば見なられた赤く刻まれた三画の紋様。

「うん、確かに契約は完了したね。……えっと、久しぶりだねセイバー、あと遅くなつてごめん。」

「まっただ、いつまで余を待たせるつもりだ」

腰に手をあて顰めつ面の金髪の美少女にプツと笑ってしまう。
かわいいなあ〜と内心呟きながらごめんだって、と謝る。

「そう怒らないでよ、……うまく魔術が使いこなせて中々呼びだせて、でも……セイバーの事、忘れてなんかいなかったよ。」

「……まあ、いい。会えなかった分はこれから取り戻せばいいし、今は……再びそなたに逢えた事を祝意しよう……」

目を閉じ一度深く深呼吸すると、次に翡翠の瞳が見えたときには、その瞳は濡れており、白い肌は薔薇色に染まると口を開いては閉じて、翡翠の瞳はあちこちと目を泳がしている。

素直になれずに戸惑っている少女に、んつと両手を差しのべる。

「セイバー、おいで」

「ッ!……」

ピクツと指先が動くが脚は動いておらず困惑のままにいる、
しあない、とセイバーの傍に向かい、顔を除き込む。

「どうしたの？」

「……まあ。」

「んっ?なんて、」

「余の、名を……」

「……………ネ口。」

「あ、……………その、そちらではなく……………わ、たしの……………」

段々と小さくなってゆく声、語尾まで聞こえてこなくなりゴニョゴニョと呟くセイバー！。

彼女らしくない、とつい苦笑混じりのため息をつき、ソツと頭に手をやる。

「ルキア。」

「っ！」

遙か昔、まだ彼女が『暴君』とされる名がなかった頃の名を呼べば、その上げられた今にも泣き出しそうな顔にクスリと笑うと頬を両手で覆い額同士を合わせる。

「寂しい思いをさせて本当にごめん、一人にしてごめん、遅くなつてごめん……………逢いたかったよルキア。」

「そ、奏者あゝ！！！！」

ギョツと抱き締められ白兔の肩でわんわんと泣き出したクシャリと歪ませた顔からあふれだす感情や想いに今は剣（剣）としての役目も、皇帝としての名高かった名も無く。

一人の孤独を嫌う少女に白兔はゆっくり背に手を回した。

「落ち着いた？」

「うむ、すまぬな……………あの様な姿を晒してしまい。」

「謝るこてなんかないよ、セイバーすごく可愛かったし」

「なっ…!？」

ボン、と顔を赤くするセイバーに白兔はかわいいと口元を緩めてしまふ。

それにセイバーはムツとした顔をしたがムウ？、と眉をひそめた。

「どうしたの？」

「いや、ラインが」

ライン？と自分とセイバーのラインを調べると目を見開いた。

「ラインが細い。」

「ラインが細いな……」

ライン、それはマスターとサーヴァントの繋がりであり魔力の供給に必要なものだ。

「まいったな、ラインを繋ぎ直したほうがいいかな…？」

「一度ラインを切るのかっ？」

「そうだね、そうなることから離れて、部屋に戻って……セイバー？」

頬を両手で挟まれセイバーがムツとした顔をしている。

「却下だ。ラインを切らずともラインを繋ぎ直すことは可能だ。」

ニヤリと笑うと顔を近かせてくる、セイバー？と混乱している間もセイバーの顔が間近になってくる。

そこでやっと何をするか分かり、止めるより早く唇に柔らかに感触。

「んっ……」

それは長かった、すごく長かった……………。

「…………ン、…………ふっ」

差し出された舌が、白兎の唇をちろりとひと舐めた後、セイバーは自身の唇を舐めた。

「どうだ奏者、ラインの繋ぎ直しはうまくいったか？」

「……………、まあ、うまくいったが…………セイバー、やるならやるって言うてからにしろ。」

ジト目をしてセイバーを睨み付ける白兎は親指で自分の唇を拭き取る。

言葉使いからして、相当怒っているようだが、相手が相手なのかふう、とため息をつく額にデコピンを喰らわせた。

「セイバー、魔力の方は大丈夫か？」

制服に着替えている最中に尋ねれば、ベッドに腰かけているセイバーは無論だと胸を張る。

「大事ない、いつでも戦いを始めれる。」

「そっか、ならいいが…………」

「それにしても…………まさか、またもや聖杯戦争に参加するとはな…………つくづく奏者も好かれておるのかもな」

「やめてくれ、ただでさえ厄介なことがあるのにこれ以上は勘弁して欲しいよ」

キュ、とりボンタイを結びセイバーの方を向く。

「寝る前に言っただけ、セイバーは今回の聖杯戦争ではイレギュラー……言わば、八人目のサーヴァントにあたる、私たちの目的は——」

「聖杯の封印、または破壊であろう。」

「そう、私は……今ある幸せを守りたい——、だから私はこの聖杯戦争を止める。けど私一人の力じゃ止めることはできない、だから」「言わずともわかっておる、奏者がその意思を貫くのならば、余の剣はそなたと守り、共にある。共に勝利を飾ろう」

「うん、ありがとう……でもね、」

「奏者？」

不安げな白兔に近づくセイバーにクスリと苦笑しギュツと掌を握りしめた。

「私、守られるだけじゃなくって、セイバーの横に立っていたい。」

「わかっておる。」

「今は弱くて役に立てないけど……絶対にセイバーの横に立ってられるよう頑張るから」

「うむ、期待しておるぞ」

「うん。」

白兔は頬を赤く染め、セイバーと額を会わせあう。

いつの間にか、握りあっていた手は指と指を絡み合わせ、強く固く握りあっていた。

第十五話・サイカイ。（後書き）

赤セイバーは、ムーンセルから呼び出したイレギュラーなので、本戦での「剣の英霊」はあの人になります。

あ、今回の話で白兔のファーストキスは赤セイバーに頂かれました
いっそのこと、注意書きに百合要素アリって書こうかな…

第十六話 前兆。

「おはよう桜」

「おはようシロちゃん」

居間の障子を開け連結している台所で朝ごはんの支度をしていた桜に向かって挨拶をする。
それに桜も笑顔で返した。

「今、ちょっと手が放せないから洗濯物出来ているから干してきてくれるかな？」

「ん、わかったよ」

居間を出て廊下を進んでいる最中にセイバーの声が直接脳に響く。

あれが元となつた間桐桜か

オリジナルの

そうだよ、若干違う部分もあるけどね

うむ……………

……………襲っちゃダメだからな

うつ……………な、何をいっておるっ！余がそのようなことをするか！
そうか、ならいいけど、……………やったら戦争中、屋根で過ごしても

らうから

なっ、……………わかっておる、奏者にとって大事な存在だと十分に承知しておる。

目をおよがせて答えるセイバーに白兔は凶星か、と思いクスリと笑う。

洗面所に着き、洗濯機から洗濯物を籠に移すと、ついでと洗面台に向かい髪をといているとふっ、と笑う気配がすると同時に両肩に重みを感じとる。

鏡越しに霊体化を解き、白兔の背後から両肩に手を置き、もたれ掛かるセイバーは可憐な唇の口角を上げて笑う。

「どうした？ 霊体化解いて……」

「いや、今更ながらあのころとは随分と変わったな。」

「そう？ 髪の長さとか、目の色しか変わってない……」

「いや、外見だけではなく中の方も随分と変わった。」

「んー……そう言われてもなあ」

苦笑気味に答えればセイバーは余が言うのだから変わったのだ、と少しむくれる。

洗濯物を干し終える居間に戻ると士郎と桜が朝食の仕度を終えたようだ。

朝の挨拶をするとそれを返してきた士郎
するとセイバーから念話が頭に響く。

奏者、あやつは？

ああ、私の兄の衛宮士郎。

ほお、兄か……

襲ったら、ライン打った切る

そ、奏者っ！？ 何を物騒なことを、あと何やら邪悪なものが吹き出しおるぞ……

ニツコリしていながらも黒いオーラを吹き出している白兔にセイバ

「も顔が引き攣る。」

「白兔？どうかしたか」

「いや、なんもない」

ニツコリ笑う白兔だが、漏れ出した黒いオーラに士郎は若干顔が引き攣った。

「そついや、近頃多いね事件。」

「今朝のニュース？」

隣を歩く桜に白兔は頷く。

「新都でのガス漏れ事件、最近は頻繁におきてるしよね。シロちゃんも気を付けないとね、引火して爆発したら大変だし」

「わかってるよ、ちゃんと元栓のチェックするし、……それに家がなくなったら桜も困るし」

「え、私が？」

「うん、家がなくなったら桜の手料理食べれなくなるし……なにやり士郎といちゃつけないしね」

「し、シロちゃん！？」

真っ赤になる桜に違った？と首をかしげる。

「そ、それは、その……確かに先輩に料理に関してはご指導してもらえませんか……」

「でも今じゃ、洋食は桜が一步上手じゃん」

「……わ、和食の方がまだまだし」

「桜の作るだし巻き卵と肉じゃが美味だよ。」

「……………」

ムツとした様子で睨む桜にクスクス笑い「ごめんと苦笑し謝罪すると桜は拗ねたように視線をそらす。

「ごめんごめん、からかい過ぎた。機嫌なおしてよ」

「知りません、今日はシロちゃんの分のご飯つくってあげないから」

「えー、それは酷くない？桜の手料理を食べるのは私の楽しみの一つなんだよ、それだけはやめて。」

「わかった、やめる。…………でも、罰として、今日の夕飯の献立…………一緒に考えて欲しいな」

「…………桜、それ罰とは言えないよ。」

苦笑する白兎に桜はいいの、と得意気な顔をする。

洋食にするか和食にするかなど話をしている内に学校前まで辿り着き学校の校門をくぐった直後、異様な違和感に白兎は足を止めた。

奏者よ。

霊体化をしているセイバーが念話で話しかけてくる。

もしかとは思うが、

ああ、結界だ…………しかも、学校丸ごと覆う大きさだ

「シロちゃん？」

「ん、あー、ごめんね。確かに冷蔵庫に賞味期限ギリギリの豆腐が

あつたな——って思い出してさ」

「お豆腐か——……それじゃ鍋なんかどうかな」

「湯豆腐とか？それじゃ虎が満足しなさそうだから鶏肉入れて……」

桜の横に戻ると再び献立の話をするが、その間もセイバーと念話をする。

しかし、これほどまでの大規模な結果を張れるとは……驚きだ。
キヤスターか？

いや、そうとは限らない。結界を張ることのできるサーヴァント、
またはマスターの可能性もある、……学校か……因縁かな

弓道場の更衣室で着替えながら肩を落とす仕草を見ると、白兔はふう、とため息をつく。

「（結界の中に居る為、流石に迂闊に行動できない……それに、こっちは学生の身だ。不審な行為は出来ないし……）」

……セイバー、頼みがある。

わかっておる、奏者が動けぬ間に余がこの結界の核を探せばいいのだろう

うん、お願い……それと、少しでいいから敵の情報をお願い、でも、深入りはしないこと、危険だと察知したら遠くの方に逃げて、……私も出来るだけ探ってみるから
うむ、奏者も気を付けるのだぞ。
わかってる。

スツと遠のいていく気配に白兔はキュツと袴の紐を結びと、身を引き締めた。

「さて、私なりに足掻かせてもらっぞ。」

ヒラリと蒼の髪紐^{リボン}をひらめかせる様に白兔は更衣室を出た。

第十六話 前兆。(後書き)

いよいよ、聖杯戦争開始まであと少しです。
よし、頑張るぞっ!!

原作で言うところの凛がアチャを召喚した日の朝です。
前に書き忘れていましたが、赤セイバーを召喚した時の一時間前くらいに凛がアチャを召喚しています。

第十七話・情報交換

真っ赤な荒野の世界。

無機質な無数の剣（やいば）が突き刺さっている。

幾度も見る光景。

悲しくて、切なくて、伽藍堂のような世界……

響き渡る唄……

——体は■で出来ている。

「白兔？」

「えっ」

ハッとして顔を上げれば心配そうな桜が白兔を見つめている。

いつの間にか四時間目が終わり昼休みになっているいけない、と思い桜に謝罪する。

「あ、ごめん。ちょっとボツーとしてて……えっと、なんの話だったけ。」

「もう、白兔ったら……なんだが、眠たそうにしていたから昨日遅かったのって聞いたの？」

「昨日？ああ、……桜を見送った後に帰ってずっと予習してて、あ

とちよつとやりたいことがあつたし」

「やりたいこと？」

「そ、それより貴重な昼休みだ、お弁当食べよ。」

「あ、うん、……そうだ、この前教えてもらったレシピの作ったんだけど味見してほしいな。」

了解、と白兔は鞆から弁当包みを出し、桜は向かいに座り弁当箱を開ける。

「見た目は……まあまあだね。」

「うゝ、ちよつと形が崩れたただだよっ！」

「そうゆうことにしときましよう、味は………」

一つ箸で掴むと口に入れて咀嚼する。

桜は固唾を飲む。

「ん、美味しい。」

「ホント！良かった……ちよつと不安だつたんだ」

安堵したよにホツとする桜に白兔は頬を緩める。

「そんなことはないよ、塩加減も丁度いいし薄味で美味しいよ、それに桜の作るのはどれも美味しいし不味いのもない、それにさ、味付けも私好みだよね」

「そ、それはっ！たまたまだよ……！」

「まあ、私らが教えているんだから味付けが似るのもおかしくないよな……その内、ウチの台所取られちゃうかも……あ、その前に家の朴念仁を振り向かせるのか先か」

クスクス笑う白兔に桜はもう、と頬を赤らめる。 そんな桜に可愛

いな―、と頭を撫でればますます真っ赤になる桜。
撫でていた手を引き、フツと窓の外を見上げる白兔に桜は首をかしげた。

久々に見たあの夢。

何もない荒野、無数の剣、悲しげな唄。

それが、何を意味するかわからず。

覚えがない筈なのによく知っているような気がしてならない。

「（体は……何で出来ているんだ。）」

白兔は視線に気がつき見上げていた視線を戻しはにかんだ。

じつと空を見上げる白兔……

時より白兔はこうして空を見上げている。

何を考えて何を見ているのかわからないが、その横顔はとても悲しそうな顔をしている

その時に感じる酷く不安な気持ち、いつか白兔が突然居なくなってしまういそうな気がする。

不安な顔をしているといつの間にか白兔は視線を戻しはにかんだ。

「たべよっか」

箸を持ち、弁当箱を開ける白兔。私は白兔のようにはなれない……私は役に立たずだから、私が何かをしようとしても何の意味もないから……ギョツと膝上で拳を握る、私を見て首をかしげる白兔……

「桜」

名を呼ばれ顔を上げれば白兔はポンツと私の頭を撫でると優しい笑顔をした。

「食べよ、な」

優しい笑顔に泣きそうになったが堪えてうん、と頷く。

部活を終え、桜と買い物し家に帰る。

「あ、シロちゃん……今日、夕食食べていけないんだ」

「え、もしかして用事？……ん、わかった。でも、それならわざわざ此方に来なくて良かったのに」

「でも、私当番だし。先輩はバイトだし、ね」

「んー……そうだけど……ま、最近物騒だし早く帰った方がいいしね……でも、間桐さんらになんか言われたら連絡してね、説得させるから」

『殺すから』と副音声があつたらそう聞こえたであろう。

「じゃ、また明日ね」

「うん、また明日。」

玄関で桜を見送った後、上げていた手はだらりと下ろした。

「セイバー」

「うむ、」

スツと姿を現したセイバーに白兔は視線を送る。

「どうだった」

「大体の目星はついた」

「そっか、私も大体……は、かな」

白兔は踵を返し自室に向かう、セイバーは当然のように付いてくる。自室に入ると念のためと結界を張る。

「さて、情報提供し会おうか。」

ベッドに座るセイバーと向かい合うように椅子に座るとセイバーは口を開いた。

「結界の核……魔方阵はつけたのは屋上を含め三つ、それと校内で微かだが魔力を感じた」

「それは人間から？」

「いや、確かめる前に消えてしまった……あと、学校の外から魔力を感じた……何やら高い建物が並んだところからだ」

「それって新都？……恐らくはマスターかサーヴァント……いや、二つ一緒って可能せいもあるな」

「どうする」

「……今は放っておこう、下手に行動すると大変な事になりかねないそれに、どれ程の実力かもわからない」

「随分と弱気だな、余が信用できねか？」

「まさか、セイバーは凄く強いよ……誰にも負けないくらい」

「！……ふん、褒めても何も出ぬぞ」

「はいはい、わかってますよ」

クスクス笑う白兎にセイバーは笑うな」と拗ねる。

しばらく和やかな雰囲気が続いたが白兎は真剣な眼差しをすれば緊迫した空気に変わる。

私の番だね、と白兎は口を開く。

「私の予想ならおそらくはムーンセルの様にサーヴァントは固定されている可能性が高い、間桐慎二はライダー、遠坂凛はランサー……他はわからないがこの二人には注意した方がいい。」

「残りはセイバー、アーチャー、キャスター、アサシン、バーサーカー……遅かれ早かれマスターとサーヴァントの確認し一刻も早く始末した方がよいだろう」

「うん、でもムーンセルで対敵した相手とは限らない……注意はして。」

「うむ、わかっておる。だが……余と奏者が力を合わせれば敵サーヴァントなど殲滅してける。」

「心強いよ、セイバー……ありがとう。」

白兎はセイバーに向かって微笑む。

第十七話・情報交換（後書き）

いよいよと開幕に近づいてきました。

セイバーが感じとった新都の正体は赤主従です。

それと、白兔は凜のサーヴァントを勘違いしています。

第零話・Lullaby of Destruction（前書き）

予告です。

第零話・Lullaby of Destruction

月から降り立った蒼い魚。

真紅^{あか}い騎士と戦場を駆ける。

だが、神の使いによって騎士を失い、汚染された魚は奈落に墮ちる。

目が覚めた魚は赤く汚れていた。

魚は笑った。

赤い手を伸ばし届かぬ月を掴む。

魚は歩いた。

引き留める者の声を聞かぬまま脚を進める。

魚はうたう。

悲劇と残酷の詩^{うた}を口誦する。

自身を追う愚者に魚は笑う。

掌で顔を覆い、クツリ、と笑う魚はゆらりと身体を揺らす。

漆黒の髪に虚ろの蒼い瞳。

白魚の様な肌に魚鱗の様な赤い刺青が頬をはしる。

黒髪を結んでいる蒼い髪紐リボンだけが鮮やかに色づく。

黒髪を揺らしクスクスと笑う声は鈴のようで、自身の胸に手をおき笑う魚。

「私はずっと憎かった。《彼女》を犠牲にした世界を、シロウの大切な者を奪った世界を、私の友を苦しめた世界を、ただ夢を追いつけた結果に与えられた永久に縛られ続けられた彼を縛りつけた世界を、……私は全てが憎かった。私の大切な人を苦しめる世界が憎い。その結果、私の中に植え付けられた種は芽吹き、月の聖杯は憎悪に汚染されてな……そうだよ、シロウ……私は知らぬうちに、『この世すべての悪』に近い存在になっていたんだ。」

魚は白魚の様に白い手を伸ばし、嘲笑を浮かべる。

「さあ、どうするシロウ？このままだと私は大聖杯に向かい世界を殲滅するよ、……止めるなら殺さないかね。」

ニツコリと微笑む彼女は、あの穏やかな日々と同じ笑顔を浮かべていた。

彼女
魚の兄は剣を握る。

魚は感動したのか笑みを浮かべる。
彼女

魚は鋭利な刃を兄に向ける。

「シロウ……私と、ワルツをおどりましょう。」

魚は笑う。

魚はわらう。

魚はワラウ。

「士郎……約束、守れなくて……ごめんね。」

彼女は笑いながら赤く染まり、泣いていた。

第零話・Lullaby of Destruction（後書き）

なーんてねえー……

嘘です！！

遊び心で書いてしまいました。

こんなのは本当のＵＴの予告ではありません！！

本編はちゃんとハッピーエンドにします！！

でも、書いていて楽しかった、うん！

ＵＴを書きはじめる前に考えていたネタの一つだったので書けて嬉しいです。

この回の白兎はマーボーによって赤セイバーが消滅され、身体を汚染されてしまい、汚染した白兎にマーボーは紅葉おろされました。汚染された白兎は大聖杯を探しに彷徨うという設定でした。

この話はある一つの話の分岐点での出来事なので本編とは何の関わりもありません。

なんなんでも簡単な設定を書いときます。

汚染された白兎

通称「黒ウサギ」

汚染によって変わり果て人格まで変貌した禍々しい姿へと変わってしまう、自身の大切なモノを苦しめる世界を憎んでいる。

ムーンセルの力の制御はしていないので心身共に満身創痍にも関わらず動きまわる。

エミヤシロウに対して歪んだ愛情を抱いている（ブラコンでヤンデレ）

黒桜と反対で漆黒の髪に蒼い瞳をしている。

タイトルの訳は「破滅の子守唄」と読めます。

番外編 白兔と盲目少年（前書き）

本編開始前の設定です。

新たなオリキャラと白兔の会話です。

番外編 白兔と盲目少年

ピンポン、とインターホンを押し数秒間待つ。

「……………あれっ?」

白兔は玄関前で首をかしげる。

今日は友人と約束していたはずだが留守にしているのかとノブを回すとドアが開く。

「あれっ?」

普段なら閉めてあるはずの扉が開いた、フツと嫌な予感がした。

「ミーヤ? おゝい、留守か?」

少し開けて様子を見る為に覗くが、シン、と静まった室内。

玄関には友人の靴が置かれてある。

フツと嫌な予感が膨れ上がり無断ながらも靴を脱ぎ捨て上がり込む。

「ミーヤ? 雅?」

室内は物音がしなく首をかしげながら居間の戸を開けようとしたさい二階から微かな音が聞こえ二階に上がる。

音は書斎から聞こえノブを回し開ける。

書斎に入ると白兔はピシッと固まってしまふ。

書斎の角に本棚から雪崩れた本の山の下からはみ出た両脚に持っていた風呂敷を落としてしまった。

「み、雅いいつつ——!?」

白兔の叫び声が響きわたった。

「いやあ、助かったよシロー。」

へにゃんと笑う黒に近い赤毛の少年はすまなさそうに謝る。

「はっ……ミーヤ、今度から気を付けてくれ」

膝をつき頂垂れる白兔にごめんね、と謝る。

白兔は友人の頭を軽く叩くと痛いよーとスツと手を伸ばしたがその手は空をきる、あれつと手探りをする手は彷徨う。その手を白兔は呆れながら掴む。

「どこを探しているんだ。」

「あ、そこに居たのか。」

へにゃんと笑い握り返す友人、目元を覆った包帯。
なるかみ 鳴神 みやび 雅、

白兔の小学からの友人で昔にあった事故の怪我で失明してしまった。

両親とは絶縁しており、今は姉と二人で暮らしている
盲目ながらも日常生活には特に苦はない……が、

「んっ?……焦げ臭い。」

「あ、そうだ、たしか台所の……」

「おまつ……!？」

繋いでいた手をほどき、階段をかけ降りると台所の戸を開ける。

「ぎゃ——!! 鍋焦げてるっ!!」

慌てる火を切り、鍋つかみで鍋を流し台に置くと水を出す。

「はっ……焦った。」

白兎はガクツと肩を落とし安堵した、のもつかの間。

「ぴぎゃあ——!？」

ドカドカ、ドンガラッシャーンツ!!

「……………はあ」

一難去つてまた一難とはこの事かと白兎は頭を抱えた。

「本当にごめんね。」

「いい、お前のドジなところは承知済みだ……ほら、肘見せろ。」

書斎のドアの溝に躓きふらつき階段から転げ落ち、廊下に置いてあった花瓶を壊してしまった雅だが、運が良いのか破片で切ったり捻挫や打撲はなく擦り傷で済んだ。

怪我の治療をテキパキこなす白兎に申し訳なさそうに笑う雅。

「で、台所で何をしていた？」

「え、昨日のカレーを温めていたときにこの前読んだ本が面白かったからシローに貸そうと思って書斎に行ったら本の雪崩に巻き込まれて……えへへ、ごめん。」

「……とにかく、火をつけたまま火元から離れるな、あと本なら一緒に取りに行くから一人でいくな……あと、玄関の鍵をちゃんと閉めとけっ！」

「いつ！いたたたっ！——シロー本当にごめんてばっ！痛いっ！染みるう！！」

「だいたい泥棒に入られたらどうすんだよっ！？」

「だから、ごめんてばっ——！」

手当て後、お茶を淹れると、持って来た風呂敷に包んだ弁当のおにぎりで日向で遅めの昼飯をとる二人。

「桜ちゃんは元気？」

「ああ、相変わらずだ……変わったことと言えば最近、うちで料理の勉強をしようになった。」

「そっか、土郎さんの怪我は？」

「もうほとんど治っている、……って、米付いてるぞ。」

「んっ、ありがとう……シローってお母さんみたいだな。」

「はあ？私のどこがだよ」

「何て言うかー、世話好きって言うか……全てを優しく包み込んでくれる慈愛？みたいな感じがする——いてっ」

雅の言葉に呆れながら頭を叩く白兎は何いってんだよとクスクス笑うと雅は何すんだよー、とへにゃんと笑う。

カラになった弁当箱を風呂敷で包み、残りのお茶を飲み干したあと、二人は暫し日向ぼっこをしていたが、傾けていた身体を起こした。

「じゃ、そろそろやるか。」

「ん、」

二人は立ち上がると中庭に出る。

芝生の上で向かい合わせになった二人。

上着を脱いで結んでいた髪を解き、三つ編みにすると構える白兔に雅はニツと笑う。

「気合い入ってるねえ、そんなに気張っていないでリラックスしたら？」

「減らず口が……今日は何処まで耐えられるかな盲目の闘士さん？」

「ぬかせ、乱暴女。お前なんか三分で倒す。」

「へー……じゃ、私はその半分でケリをつける」

「言ったなあ？」

雅の中にあるスイッチが変わると、身構える。

「では、」

「じんじょくに……」

「勝負っ！」

二人は地を蹴り相手に向かって走った。

番外編 白兔と盲目少年（後書き）

少しネタ不足＋リアルでの余裕がない…

UT本編の投稿が長引きそうなので携帯でチマチマ書いていた小ネタを投稿しました。

下記に簡単な設定。

鳴神 なるかみ
雅 みやび

身長：168cm

体重：56Kg

イメージカラー：朝霧

特技：体術、何もないところで躓く、何かしらドジをする、のんびりすること。

好きなもの：日向ぼっこ、読書（点字）、暖かいモノ。

苦手なもの：雑音、ツンとする臭い。

天敵：花粉

髪・目：黒に近い赤毛・白濁した茜色

白兔の友人、昔に負った事故が原因で失明。

躓いたり階段から落ちたりとドジをして怪我がたえないが運が良く、骨折など致命傷は回避している。

視力を失った代わりに他の四感や感覚が発達している、体術を得意とし、よく白兔と組み手をするときは「闘志モード」に切り替える。強さは白兔と同じくらいでいつも引き分け。

彼も本編で絡ませたいなーと思っています。

第十八話・始まりの夜。

これが核？

うむ、これが結界の核である魔方陣だ。

屋上にやって来た二人、白兎は目に魔力をとおし、解析をすると浮き上がった魔方陣に霊体化中のセイバーに問いける。

これは、魔力の吸収をする奴だな、厄介なもの張りやがって……この結界はまだ未完成だな……しかし、それでも十分くらいだ、今から発動すればこの学校内に居る生徒や教師から生命力を奪うだろう。

なるほど、自分が良ければ良いつてやつか……だが、これを見て確信したことがある……どうやらこの結界を張ったのはサーヴァント……だが、そのサーヴァントは何らかの理由から魔力を受け取れなく、代わりにこの結界内に居る人間から生命力を奪うという魂胆だろう……外道がっ……ヘドが出る。

……やはりキャスターの仕業か？

……いや、仮にキャスターだとしても手段が粗すぎる。魔術師のクラスを持つ英霊ならもつと慎重で策略を練る筈だ。

白兎は魔方陣から目を放し、フェンス越しにグラウンドを見下ろす。その横でセイバーは腕を組み、頭を捻っているところとあることに気がつく。

………うむ、奏者よ。結界を張った奴のマスターに心当たりがある。

その言葉に白兎はへえ、と答え。

奇遇だね。……私もだよ。

ニヤ、と笑う白兔、霊体化中のセイバーも白兔同様にニヤリと笑う
気配に白兔はクスクス笑う。

じゃ、さっそく仕掛ける？

いや、まだ暫し泳がせおき。じっくり甚振ってからどん底に陥れ
てた方がよい。フッフ…どうやって料理^{痛めつけ}してやるのか…

セイバー、暴君モードにはいつているよ。まったく、セイバーっ
たらやるねえ！

白兔は楽しげにクスクスと笑うが、内心ではどうやって甚振ってや
ろうか考えていた。

そんな中、フツと校門を潜る一人のツインテールの女子生徒に気が
ついた。

「……………」

奏者？

ん？……ああ、……大丈夫だよセイバー、どんな相手だろうと私
は負けない。

……無理はするな、余がついておる。

ありがとう、……帰ったら士郎に今日の話を話す、士郎は変な
とこで冴えているからもう気がついていいるだろう…それに、私達が
発見していない魔方阵を見つけているかもれない。

それでいいよね、と問おうとうむ、と頷くセイバー。

屋上を離れるな際、グランドを見下ろし女子生徒を見る。

「……………凜。」

白兔の悲痛な面持ちで呟いた言葉は誰にも聞かれず風に消えた。

午前の授業を終えると部活に行く前に二年生の教室を覗く。

「おや、衛宮の妹ではないか」

「柳桐先輩」

眼鏡をかけた二年の生徒、柳桐一成に白兔はこんにちとは挨拶をする。

「すみませんが兄を呼んでいただけないでしょうか？」

「衛宮をか？暫し待たれ。」

一成は荷物を纏めている士郎に声をかければ気がついた士郎は扉近くに駆けてきて一成は自分の席に戻った。

「白兔どうした？」

「ちよつとね、……士郎、帰ったら大事な話がある。」

「大事な……？学校じゃ話せないのか？」

「家でないとダメ、だから早めに帰ってきて、わかった？」

「お、おう」

不思議そうな顔をする士郎に念を押し、それじゃ、と部活に向かった。

「遅い。」

居間の机に湯飲みを乱暴に置く白兔。

大事な話をする為、桜と藤村には6時頃に帰ってもらった。だが、念を押したにも関わらず暗くなつたに帰ってこない、既に7時を過ぎている。

「話があるから早く帰ってこいって言ったにも関わらずまだ帰ってこなくしかも連絡もなし……………ぜってーにシバく。」

不機嫌オーラをふきだす白兔の反対側ではセイバーはテレビに向かい、放送されている世界の美術品の特集番に食いついていた。

「まあ…………あの馬鹿でお人好しな奴のことだ、誰かに頼まれ事されたに決まってる……………セイバー、学校に行くよ。」

「なっ、これが終わってからにしないかっ!？」

「ダメ、…………その番組なら録画しているから後でちゃんと見れるからさ」

「むっ……………わかった。」

渋々と立ち上がるセイバーに白兔は拗ねないでと頭を撫でた。

ひんやりした夜風に肩を振るわせ、黒のコートを合わせ直した。

いつ敵のサーヴァントが襲ってきてもおかしくない状態のため、白兔は正体を隠すため黒で統一されたハイネックにパンツにコートとマフラーと手袋、髪は束ねた状態のまま三つ編みにし帽子を深く被っている。

セイバーはその横で霊体化をしている。

「寒い……………まったく、あの馬鹿野郎…………約束破り、薄情もの」

奏者は、あの兄が好きなのだな。

何言い出すの突然。……まあ、好きって言うより大切な奴っていった方があっているかな……

ほう、………

な、なに？

いやはや、……少し妬いただけだ。

セイバー？

何もない、……そろそろ学校につく——っ！

「セイバー？」

立ち止まった気配に白兔は振り返った。

セイバーは霊体化解き、真剣な顔をする。

「奏者よ、学校からサーヴァント同士の気配を感じた。」

「え、——……セイバー、私を抱えられるか？」

「造作もない、急ぐぞ。」

「うん」

ひらりと白兔を抱え込むとセイバーは地を蹴った。

学校に着くと白兔はセイバーに身を潜ませるようにと校舎脇に降り立つと身を潜ませながらグランドを見る。

グランドには青い鎧に赤い槍を持つ男と赤い武装を身につけた双剣を振るう男が対立して戦っている。

その青い鎧の男には見覚えがあり、その遠くのほうに立つ人影に白兔は目を細める。

やはり、遠坂凜はランサーのマスターだったのか。

うん、やっぱり遠坂はムーンセル同様にランサーを呼び出したようだね

端からサーヴァント同士の戦いを見るのは二回目だ。

思わず身震いした、槍と双剣の奏でる響き渡る鋼の音。迫力ありすぎるだろと思った。

ジツと戦いを見つめていた白兔はランサーと対立している赤い男を見て胸騒ぎがした。

「（なんだろう、あの人を見ていると凄く不安になる……、これは
いたい……？）」

訳のわからない不安の中、胸ぐらを掴み戦いを見つめている矢先、
ランサーは赤い槍を構えた。

宝具を使う気だ。

一瞬にして空気が凍る。

セイバーは知らず知らずのうちに固唾をのんだ。
緊迫の中、ランサーは突然振り返り声を荒げた。

「——誰だ………！！！！」

第十八話・始まりの夜。（後書き）

意外とあっさり結界の犯人がわかってしまいました。

月の聖杯戦争時の経験からして結界を張って狡賢いことするのはアイツしかいませんし、ピーンと来るんじゃないかと思いついて。

どう扱うか楽しくなってきました…ワタシ、アイツスキデスヨ…（色んな意味で）

そして、ついに始まった、聖杯戦争。

やっとここまで来たつと、噛みしめ完成できるよう気合いを入れて頑張ります！

でも、戦闘書くの苦手です。

あ、白兔はまだ、勘違いしています。

次回の（書く内容の）目標：槍との接触、逃亡、召喚。

第十九話・遭遇

「——誰だっ！！！！」

ビクン、と身体がはねる、見つかったっ！？と焦る白兎、いつでも飛び出せるよう構えるセイバー……だが、ランサーは二人が身を潜めている反対側を睨み付けているその方向から誰かが走り去って行く、その後にランサーが追う。

助かった、と思ったが、ハツとした。

ランサーが追ったのはたまたま残っていた一般人なら危険すぎる。

「セイバー、後を追うよっ！」

「む、何故だっ？」

「ランサーが追ったのが一般人なら不味いことになるっ！それに見す見す見殺しに出来るか、願いセイバー」

「うむ、良いだろう。」

セイバーの返答に頷くと白兎は脚を強化すると一気に駆け出した。

士郎は校舎の中を走っていた。

頼まれた作業を終え、帰宅しようとした際に校庭で二人の武装した男達の戦闘を目撃してしまった、尋常ではない光景に呆然としていたが、赤い槍を持った男に見つかってしまい、咄嗟に逃げた。

士郎は逃げながら今更になって後悔した、逃げるなら町中のはずだと罰する、

切嗣に建物内では逃げ場が狭すぎて返って狙われやすくなってしまふと教えられた筈なのに……今ここに妹が居たら「馬鹿じゃない。」

と罵声を言うに決まっている。

とにかく、今はあの男から逃げなければっ！と、必死に駆けたが、ゾツとする殺気を感じ、ブレーキを掛け反射的に後ろに跳んだ。

「——くっ！」

咄嗟に後ろに飛ぶとさっきまで居た場所に槍の穂先が床に刺さっている。

間一髪、霞めた髪先は空中を舞った。

床に手をつき、士郎は槍を握る男を睨み付ける。

男はほう、と感心したような顔をしている。

だが、ハツとした瞬間に突進してきた穂先が迫ってきて真横に跳ぶ、頬を擦る。

ギリ、と歯を食い縛る。

士郎は自身の行動に恨んだ。

辺りを見回したが武器になりそうなものもなく反撃しようにも場が狭すぎる、それに迂闊に攻撃すれば殺される、最悪すぎると男の攻撃を避けながら思いつきがないか考えた……

だが、ほんの一瞬の隙が出来、槍が突進してくる……

不味い、死ぬ。

「伏せっ！」

咄嗟に聞こえた声に条件反射で膝を折った。

「ぐっ！？」

鈍い音がしたと思うとトン、と真後ろから着地音に顔を上げ振り返った。

黒衣に身を包んだ青い髪紐を揺らす少女の後ろ姿に驚いた。

「しろ、……おまつ」

「説明はあと。」

ギロツと少女……白兔に睨まれ口を閉じた。

「奏者、奴は建物内だ。」

ランサーの気配を察知したセイバーの声に頷き、目に魔力を通すと校舎内を解析をした……追われている奴は上かつ！

>セイバー跳んで、窓からっ！<

>うむっ！<

セイバーの腕が腰に回されると一瞬で身体が地面から離れるとガラスを突き破り中に侵入すると、そのままセイバーは廊下を駆けた。

——居た。

ランサーと対峙する人影にフツと心当たりがあり、心の中でのバカはっ！と罵声する。

>セイバー、私を投げろ<

>奏者？<

>ランサーに投げるつもりでやれっ！<

>……承知したっ！<

セイバーはグツと腕に力を貯めると思いっきり白兔を投げた。

「伏せっ！」

白兔は叫ぶと人影は瞬時に膝を折った。

ランサーが気がつき振り返ったがいきよいまかせに蹴りつけた、「ぐっ！」と呻いて、前方の壁に向かってふっ飛び、壁に激突し土煙をたてた。

やり過ぎたかと思ったがサーヴァントなら大丈夫かと片付け、蹴りつけた勢いでスピードを落とすと、と着地すると後ろから啞然としたような声が聞こえてきた。

「しろ、……おまつ」

「説明はあと。」

ギロツと目だけで睨めば、追われていた人……兄である士郎に口を閉じさせた。

白兔は壁に激突したランサーが体勢を立て直すまえに、退散することにした。

>士郎、退くから。<

>え、…わかつた<

念話で話し掛けると立ちが上がった士郎は身構える。
次に霊体化したセイバーに話し掛ける。

> セイバー、退くよ<

> 戦わぬのか？<

> 場が悪い、辛抱して<

> 止むを得ない、退散とするか<

両者の同意を得ると素早く懷から卵形の球体を取り出し、それを投げつけると、

白兎は向かって腰に下げていた銃を突き付け、撃った。

カツと発せられた閃光が光ると白兎らは窓ガラスを突き破った、脚を強化し着地すると町中に逃げ込んだ。

少女が校舎内を走っていると、いきなり自身のサーヴァントが現れ手を広げ道を遮られた、少女が口を開こうとしたが、前方に居る赤い槍を肩に担いだランサーが割れた窓ガラスから外を見ている姿に体勢を立て直すがランサーは振り返るとニツと笑う。

「ワリイが、先にやっておかねえことが出来ちゃった……命拾いしたな嬢ちゃん。」

そのまま、ランサーは割れた窓ガラスから外に出て行ってしまった。

第十九話・遭遇（後書き）

第一接触これでいいのか…？と悩みに悩んで書きあげました。
白兔の投げたのは閃光弾です、閃光弾はバイオのイメージで
流石に突然と眩しい光が放たれたらサーヴァントでも怯むはず…と
思いました…

次回は二人目の剣士が登場します！！多分。

第二十話・ハジマリ。

息を切らし、走る二人の士郎と白兔。

士郎はがハッと何かに感じとり振り替えると白兔の腕を掴み物陰に隠れる。

「しっ」

物陰に身を潜めていると、さっきまでいた場所に槍を持った男が辺りを見渡すと何処かに跳び去っていった。

「あいつ……もうここまで追ってきたのか。」

「当たり前だろ、あいつはランサーだ」

「え、ランサーって……まさか、」

「説明は家に戻ってから……」

奏者よ、余が出て時間を稼ごう。

いや、まだ下手に動いちゃダメ。今は士郎を安全な場所に移動させるのは優先する

白兔はしばらく考えると懷から正方形の角砂糖位の石を取り出しをやると自身の魔術回路を開く。

「——
コネクション・オン
接続開始」

「汝、我が鱗片を辿り、冬の吐息と共に羽音を奏で顕れよ」

石が仄かに光るとパキパキ……と形を構成し変えると、一匹の掌に乗

るくらいの蒼い蜂が二人の目の前を浮遊している。

「ケイモーン、すまないが暫く囿になつてくれないか？」

蒼い蜂は、白兎に近くと小さく頷き、暗がりを抜け飛び去った。

「今のうちだ、アイツが囿になつている間に家に行くぞ。」

「ああ」

二人は頷き合つと、人目につかない細道を通る。

奏者、あの蜂はエネミーか？

そうだよ、蜂の形をしたエネミーで彼らのデータを元に作った核に私の魔力を使って呼び出せる私の使い魔、余談だけど同時に四体まで呼び出せるよ

ほお……中々粋なことをやっておるな

そんなことはないよ……それよりは、セイバー……私が良いつて言つまで姿を見せないで。

……何故だ？

今はセイバーの事を敵に知られるわけにはいかない……。

……仕方ない、しかし奏者の身に何か起きたら現すからな。

ありがとう、セイバー

二人が衛宮邸につく頃にはすっかり日付が変わっていた。

二人は、電気を付けずないまま居間に座り込んだ。

「ひとまず、安全な場所についたね」

「は……、白兎、どうなっているんだ？あの男がランサーってこ

とは、じいさんが言っていたサーヴァントの一つだろ……どうなっているんだ？」

「それについては、きょう——……っ！」

ハッとしたようにすると、顔をしかめる。

「白兔？」

奏者？

「——、……使い魔がやられた。」

「なっ……！？ランサーはどうなったんだ」

「わからない……けど、此方に向かっているのは確かだっ……土郎、何か武器を……」

焦る気持ちを落ち着け、土郎に忠告した直後、屋敷中に響き渡る警告音に身を固くする。

しっかりするんだ、奏者っ！

あ、……うんっ！

「土郎、そこに転がってるポスターを……」

「ああ……」

身を低くし白兔は銃を構え、土郎はポスターを強化した。しん、と静まる屋敷内に響く音に知らずと息が荒くなる。

奏者っ！

「っ！」

セイバーの声で土郎の方に跳ぶとさっきまで白兔が居た場所に赤い槍が突き刺さっていた。

「お、お嬢ちゃんいい反応してるな」

青い鎧姿のランサーはニツと笑って茶化すように言うが、目は獲物を狙う獣のようにギラギラとしている。

「そこにいる坊主に用があつたんだが、もしかすると俺に蹴り食らわたの嬢ちゃん？……そんなら、嬢ちゃんにも用が出来たわ……わりいが二人まとめと死んでもらおうかつ！」

ランサーは一瞬で迫ってきて避けることが出来ずにいたが、士郎が前に出て強化したポスターで槍の軌道をずらすと、白兔が銃を撃つがランサーは数歩下がり槍で銃弾を弾いた。

しかし、それも一瞬の出来事で、ランサーは士郎達の目の前に迫ってきて咄嗟に防御をするが、思いつき蹴飛ばされ、ガラス戸を突き破って庭に転がり込んだ。

「――、ゴホッ！…白兔大丈夫かつ！？」

「何とか…！」

痛む体勢を立て直し、士郎を見る。

手にしていたポスターはさっきの蹴りに耐えきれず粉碎してしまつたらしい、丸腰の士郎ではランサーに対抗出来ない。

「士郎、土蔵に行け」

「え…？」

「土蔵で武器になるのってこいつて言つてんだよ！…私が時間稼ぐっ！」

「けど…！」

「早くっ！」

「……………すぐ戻るっ！」

一瞬迷ったようだが土蔵に駆ける士郎を背にランサーと対峙する。

「おいおい、嬢ちゃん一人でやる気か？」

「そう？ やってみなきゃわかんないじゃんか、それにそう簡単に殺されるよりマシだし」

「あー、そうかよ……………つくづく女運ねえな……………」

ランサーは槍を構えると槍を突き出してきた、寸前で避けるとランサーに銃口を向け撃つとランサーは槍で弾く。
チツと舌打ちをしてしまう。

「弾くんじゃねえよ」

「無理言っつな、そんな物騒なの一発喰らっただけで十分ッだっ！」

ランサーの突き付けられる槍を避ける事に集中し銃で槍を防ぐ、早いっ！と顔を歪ませる。

あくまで士郎が戻るまでの時間稼ぎだとわかっているが、隙を見せればあの槍が自身の身体を貫く。

これ以上は耐えきれない、と思いセイバーを呼ぶため念話を繋いだほんの一瞬で、脇腹に激痛が走り息が詰まると身体がふっ飛んだ。

それが、ランサーが白兔に蹴りを喰らわせたときだった時には自身の身体が塀にぶつかる手前、

「奏者ッ！」

姿を現せたセイバーは塀にぶつかる前に白兔を受け止めた。

「奏者っ！ しっかりしろっ！」

「ぎつ——っ、うゝあ……！……あ、……あの、ヤロオ……！」

セイバーに支えられながら立ち上がると青い背が土蔵に向かってい
るのが見えた。

「セイバー！ランサーを——」

追え、と言い切る前に土蔵から眩い光が溢れ出し、ランサーが土蔵
から出てきた。

「む、……どうやら、あやつが最後の奴だったらしい」

「え、最後って……まさかっ！」

光が止むと、土蔵から青いドレスに銀色の鎧を身にまとった少女が
ランサーに飛びかかった。

「……七人目の、サーヴァント……！？」

第二十話・ハジマリ。(後書き)

はい、青い人が出ました。
一言も喋ってないけど…

今回は「赤青セイバーの遭遇、赤主従の対峙」が目標です。

●ケイモーン

EXARに出てくる一の月想海の蜂のエネミーです。

負担の少ない一番出しやすい使い魔。

攻撃力がありますが、主に結界を張る役目を任されています。
名はギリシャ語で四季の冬を意味します。

第二十・五話 着火（前書き）

ちょっと、本編とは別に動いている話です。
今のところ Fate キャラは出ていません。

第二十・五話 着火

あつい。

身体が火照るような熱さに寝苦しくなり起き上がると寝具から抜けると暗闇を手探りで歩き、部屋を出た。

あつい。

身体があつい。

焼けるようにあつい。

業火に焼かれているようにあつい。

頭が痛い。

ノイズがする。

階段を降り、手探りで洗面所に向かうと洗面台に手をつき、項垂れるようになる、コックを捻り熱を冷ますために水を被る。

しかし、熱は下がらずますます身体中が焼けるように暑くて仕方ない。

あつい。

身体があつい。

頭が痛い。

ノイズだらけの聴覚。

焼け焦げる臭いがする。

荒い息切れのように喉がヒューヒューと鳴る。

頭を上げ、前を向く。

その前方に見えたものに驚愕した。

ありえない。そう思った。

だが、見ているその先にある鏡には、同じように手をついている自身が居た。

だが、鏡の向こう側の自分が笑って暗闇の中でも分かるくらいに鮮やかな緋色の瞳をしていた。

ガサガサツと物音に目をさまし、寝具から抜け、部屋の扉を開けると玄関の開閉音がした。

廊下に出ると隣の部屋を覗くがそこにはいるはずの人物が居なく、慌てて一階に降りると玄関を開け、道路に出て辺りを見回した。

「――、」

口から音もなく出た言葉は白い息となって夜の空に消えていった。

第二十一話・接触

目の前で繰り広げられる、戦闘に目を奪われ呆然とした。

赤い槍を操る青い男、ランサー

それに対峙するのは目には見えないなにかを持つ青いドレスに銀色の鎧を纏った、少女……しかし、その少女の顔立ちに白兔は驚いていた。

「なんで、セイバーと……同じ、」

「落ち着くのだ、奏者……あれは余ではない。」

「えっ？……それって……」

「あの者は、余とは違う時代の地で名を馳せた、外見が似ているだけであつたくの赤の他人だ。」

ジツと青い少女を見つめるセイバー

「……つまり、別人……なんだね」

「ああ」

頷くセイバーを見ると、少しだけ落ち着つき傾いていた身体を起こし脇腹を抑える。

「セイバー、霊体化してて……あっち側はこっちに気がついていないようだ。」

「……しかし、」

「大丈夫、無理はしない。」

「……すぐに呼ぶのだぞ。」

不安そうにしながらもスツと姿を消したセイバーに内心で謝った。
目の前の戦闘に視線をうつすと、何か喋った後……男が構えた。
あの体制、と学校で構えた姿と似ていた。

ザワリ、と纏う空気が変わった

そして、繰り出された――

赤い槍が少女を突き刺し――……だが、槍は少女を貫く前に少女の
持つ何かに弾かれた。

男は信じられないかのように目を見開いている。

ハツとし、遠くに飛ばされた銃を拾い上げ上に向けると、発砲した。
パン、と発砲音に振り返る二人に白兔は無表情のまま告げた。

「動くなっ、……これ以上家で暴れ回るはやめてもらおうか。」

銃口を二人に向け、淡々とした口で告げると男はハツと鼻で笑った。

「おいおい、お嬢ちゃん。そんなので脅して引き下がるとでも？」

「お生憎様、そんなご心配なさらずに……」

冷淡に笑い飛ばすと男は眉を潜めるがフツとなにかに気がついた。
その姿にニヤリと笑った。

「おや、気がついたか？……家の防犯装置が作動している。……家の
結界は侵入者が侵入した時に鳴る警告音の他に敵意を持つものが
侵入した時、強制的に侵入者の魔力吸収を行う仕組みになってんの
……長居していると魔力カラッポになっちゃうよ？お兄さん」

「……けっ、……迂闊だったぜ……一歩取られたか……今日の所は
退いてやるよ。」

「どうぞご勝手に……」

ランサーはニヤツと笑うと一気に扉まで跳んで去っていった。

男が去った後、結果の効力が治まると、途端に気が緩んで白兎は座り込み重いため息をつく。

青い少女は男を追おうとしていたが背後から呼ばれ声に振り返った。

「セイバーッ！」

「……マスター」

下げていた頭を上げると少女が土蔵から出てきた兄と何か話している。

左手の甲に刻まれている刻印に白兎は確信し、小さく舌打ちをする。此方に気がついた士郎が駆けてきて白兎は立ち上がり士郎に向き直った。

「白兎っ！無事か…？」

「……無事なわけではないでしょ、……強敵目の前にして生きているのか奇跡的だよ……でっ？」

「でっ…？」

「後ろの人、誰？」

ジト目で睨み付けると途端に士郎は慌てたように少女を見て白兎を見て、えーとつと頬を掻く。

白兎はジツと睨めつけて、まさかっとな眉を潜めて驚いた振りをした。

「士郎、あんた……まさかっ！？」

ツカツカと士郎に近寄り左手を掴む。

「……やっぱり、士郎が……」

「……白兎」

ギリツと齒を食い縛り、少女に近寄る。

「……お聞きします、貴女は——、士郎のサーヴァントで間違いないですか？」

「……はい、そうです。私は彼、シロウの呼び掛けに応じ召喚されたサーヴァント・セイバーです。」

「……セイバー 剣の騎士……——して。」

「え、……今何と？」

「……なんでもない、です。……セイバーさん。」

スツと視線をそらした。

士郎は七人目のマスターとなったことが、わかった時点で白兔の頭の中は二つの選択が浮かんだ。

彼女はまだセイバーに気がついていないようだ、やるなら今しかない。

だが、それでいいのか？と誰かが言った。

ギリツと自身の左手を握り締めた。

士郎は不安そうに声をかけようとしたが、セイバー 剣の騎士が何かに気がついたようにハツとした。

同様にセイバーも念話を繋ぐ。

奏者、屋敷外にサーヴァントの気配だ。

えっ……！？くっ……こんな時にっ！

「シロウ、外に新たなサーヴァントが来ます。貴方は此処にっ」

セイバー 剣の騎士は駆け出し塀に飛び乗る。

それを見た白兔は酷く嫌な予感を感じた。

セイバー 剣の騎士をいかせてはいけない……！

「セイバー、あの人を止めてっ
うむっ、承知した。」

小さな声で命令をすると、傍に居た気配が去る。

「白兔、……」

「士郎、ごめん。」

士郎は何かを言おうとしたが、白兔は門まで駆け出した。

一剣の騎士>セイバー<は塀を乗り越えたと外に居たマスターに斬りかかった、しかし出現した赤い男の双剣に遮られた。

だが、戦力は彼女が上。

双剣を弾くと男の腕をかする、両者が後ろに飛び一気に迫る――が、
剣セイバーの騎士の武器と双剣は衝突せずに突如現れた赤い大剣に遮られた。

「品がないな。」

赤い大剣の柄を持つ暗がりによくわからないが真紅のドレスを纏った少女がフツと口元を緩めた。

第二十一話・接触（後書き）

大変お待たせしました。

やっと、赤主従と接触しました。

Wセイバーの分け方は、
士郎のセイバーは剣の騎士^{セイバー}
白兔のセイバーはセイバー

と、分けています。

第二十二話・赤との接触（前書き）

二十二話と二十三話を合体させました。

第二十二話・赤との接触

ギリツと交差した三つの刃物が鳴り合う。

「お前…!？」

「すまぬな、余のマスターの命でこの戦いを止めにきた。」

鼻先までに近づいた大剣の少女は剣の騎士と同じ顔立ちで二人にニヤリ、と笑うと男が降り下ろした片方の剣を避けるため後ろに飛んだ。

「血の気の多い男だ……むっ？」

大剣の少女が男を見、眉を顰めるがハツとしたようにし姿を消した。少女が姿を消した途端、パアンと銃声に六つの目線が向く。

「人ん家の前で何してる。」

門の前に銃を空に向けて発砲したと思われる焦げ茶色の髪をした少女が三人を睨み付けている。

セイバー、下がれ。

門を出てセイバーに念話で伝えれば瞬時にセイバーは霊体化し白兔の傍らに移動した。
そして、空に向けて発砲した。

「人ん家の前で何してる。」

六つの目が白兔に向く。

剣の騎士とサーヴァントと思わしき男とその後ろに居る少女に白兔はえっ？と驚いた。

黒髪のツインテールの少女に眼を奪われた。

なんで、凜がここに？

動揺を隠せない白兔にセイバーが渴を入れた。

奏者っ！あやつはあの娘ではない……落ち着くのだっ

うん……ごめん、ありがとう。

落ち着きを取り戻し、凜を睨み付け口を開くと背後から誰かが走ってきた。

「セイバー！」

「……土郎っ」

着いてきたのか、と内心で土郎に舌打ちをした。

土郎のことだセイバーを止めに追ってきたのだろっ……場が悪いっ土郎はセイバーと何か言い争っているが会話を聞き取る余裕がない白兔は焦っていた。

突然のランサーの襲撃、予想外の兄がサーヴァントの召喚に加え、一番戦いたくなかった友だった人との対立。

ギリツと齒を食い縛る。

今は剣の騎士が……遠坂凜の前に立ち塞がっているがいつあのサー

ヴァントが襲ってくるか解らない。

白兔はグリップを握り締めた。

その直後、

「ねえ、もういいかしら？」

凜ッとした声に若干の苛立ちを含んだ声に剣の騎士は剣を構える。
赤いサーヴァントの後ろから現れた遠坂凜に士郎は驚愕している。

「お、お前遠坂……！？」

「ええ。こんばんは、衛宮くん」

につこり、と極上の笑みで返してくる遠坂凜、あーこの笑み知ってるわ、と懐かしさ半分呆れ半分でジト目で遠坂凜を睨み付けてチラッと士郎を見れば予想通り真っ赤になっている。
イラッときて思いつきり足を踏みつけ白兔もにつこり笑う。

「こんばんは、遠坂先輩。……まさか、遠坂先輩にこんなところで御会いするとは……それより、そちらの方は何なんですか？」

ガチャ、と銃を構えると士郎が慌てて前に出る。

「何やってんだよっ」

「何って……見ればわかるでしょ？遠坂凜はマスター、そしてその横にいる赤くて派手で仏頂面で無駄にデカくて性格悪そうでツンデレ率が高くていかにも怪しすぎる褐色白髪の方がサーヴァントに決まってるだろっ！？」

「お、落ち着けて！なっ？」

「……………っ……………わかった。」

渋々銃を降ろし、遠坂凜を睨むと何故かサーヴァントが胸元を押さえている。

何故だっ和白兔は疑問に思ったがまあ、いいやっと思えるのを破棄

した。

「えっと……遠坂も……魔術、師なのか？」

「ええ、そうよ。ま、お互い似たもんだし隠し必要もないわよね」

あー、やっぱり彼女は彼女だ、と白兔は染々思った。

あの余裕を浮かべた笑顔とか物腰とか……白兔は感傷に更けているとセイバーに頭を叩かれた。

「それより、衛宮くんと話したいことがあるから中に入れてくれな
い？」

ニツコリと微笑む彼女に対しムツとした白兔は口を開いた。

「わかった」

「ダメだっ」

「……………」

ギツと士郎を睨めつける白兔。

「士郎、何いつているの？相手はマスターだぞ？」

「マスターの前に遠坂は女だぞ？女は身体を冷やすといけないだろ
……？」

「……士郎のそうゆうとこ嫌いじゃない寧ろ……いろんな意味で尊
敬するけど今は、TPOを考えて」

「いまはそんな時じゃないだろ。」

「そんな時だろっ！」

ギリッと士郎の足を踏みつけ胸ぐらを掴む。

「士郎……あんたがやるうとしているのは泥棒にご自由に家に入つて金ものを持っていつてくださいつて言っているのと同じだぞっ！
？わかつてンのかつ！？」

「——ッ……遠坂がそんなことするわけないだろ……」

「知ってるよ、けどそれは建前で本心はどうだがわからないんだから迂闊に入れちゃダメだろ。……よし、士郎、確認しよう。」

パツと胸ぐらを放し、士郎に向き直る。

「あんたの手に刻まれてるのは？」

「令呪」

「あんたは何を呼び出した？」

「サーヴァント」

「で、あそこにいる遠坂さんはなに？」

「同学年」

「敵マスターだボケッ！！」

パシンッ、とどこからか取り出したハリセンに叩かれる士郎はいてえ、と叫ぶ。

「何すんだよっ！」

「うつせえ！こんな出来の悪い兄を持って私は悲しいわっ！」

ギヤアギヤア、と兄妹喧嘩の最中、遠坂凜はちよつと、アンタ達、と声をかけるとギツと琥珀の瞳四つが睨み付けて。

「部外者は黙つてろっ！！」

つと息を合わせたあと再び睨み合い口喧嘩を始めた。

「だいたい白兎は乱暴すぎるっ！何かあるたびにをしてくるしっ！」
「はあっ！？そんなの藤姉さんも同等でしょ！？だいたいそれは士郎が弱すぎるんだよっ！」

ギヤアギヤア

「……どーでもいいから早く決めなさいよ。」

凜の呟きは二人には届かず30分程続けられた……

チツチツ……と時計の針が時を刻む中、五人の男女が向かい合わせになつて座っている。

一方は警戒し黒髪の少女を睨む金髪少女とお茶を人数分いれる焦げ茶色の髪の少女、それに挟まれた少年は困惑した面持ち。
一方は黒髪の少女と白髪の男性。

寒空の下、長々と口喧嘩し続ける兄妹、いまにも手が出そうな雰囲気の中、長い間を空け白兎は重いため息をつき……

「わかった……じゃあ、士郎が最後まで責任もってね」

私は犬かなんかとツッコミを言いそうになりながらも押さえた凜。
話が完結し、振り返った白兎はそう言うことなで、と言い愛想笑いを浮かべる。

「どうぞ、入ってください。……あ、言っておきますが、変なことしたら即行に結界が発動しますので下手なことはしないように、あとその赤い人は出しといてくださいね。まあ、遠坂先輩に限ってそんなことしないと思いますが念には念を入れて、…ね。」

ギロリとアーチャーを睨み門をくぐった白兔にホツとしたような士郎は凜にそうゆうことになったから…と不満そうにしている剣の騎士^{セイバ}に向く。

「……マスターがそう言うならば…。」

無理に納得したように頷く剣の騎士^{セイバ}。

屋敷に入ると台所で白兔がやかんを火にかけていた。

「士郎、取りあえず着替えてきたら？まだ制服のままだし…その前に、ガラス直しといて。」

「お、おう。」

「遠坂先輩とセイバーさんは適当に座つといてください、赤いのも座ってください、無駄にデカイから木偶の坊になったら邪魔なだけですから」

パカッと茶筒を開けるとアーチャーを睨む。

凜がそれじゃ、っと腰を下ろすのを確認すると背を向けた白兔にセイバーが話しかける。

奏者、先から何故あの赤いのを睨む。

ん…何か見てると無性に腹が立つ。

よくわかんないけど、と白兔は茶葉を急須に入れた。

私服に着替えた士郎戻ってくると急須に湯を入れると、人数分の湯呑と急須と茶菓子の煎餅を盆に乗せ居間の机に置いた。

そして、現在に戻る。

「そろそろ話してもいいかしら？」

凜が口を開く。

「え、あ、おう…いいぞ。」

「どうぞ」

「そうね、とりあえず確認しときたいんだけど…衛宮君達はどこまで知っているの？」

なにがっと思ったが言うまでもない、聖杯戦争の事だろう…士郎にも伝わったのか大体はつと答える。

いちよ聖杯戦争のルールなどは切嗣から聞いたが、ヘタに口を出さない方が良くと推測し士郎に任せ白兔は湯呑を傾けお茶を啜ると剣^{セイ}の騎士が煎餅を真剣な顔で見ている。
なんだ…？

「聖杯戦争の、ことはじいさんから大半のことは聞かされた…」

「そう、それならよかった。それにしても驚いた、まさか衛宮君達が魔術師だったなんて」

「それなりに知識はあるけど…まだ、半人前だ。」

「あらそう、でもあなたはマスターに選ばれた。そうでしょ？」
「……」

ニツコリ微笑む凜に白兔は、あー、ほんと意地悪なことかあの人所つくりだつと関心していた。煎餅の包みを破り海苔煎餅を食す、剣の騎士は白兔がしたのを真似し煎餅を一口齧ると暫し固まり残りを食べる。

そして何故が頷く、何故だ…？

「とにかく、衛宮君が最後のマスターってことになるわね…なるほど、だから二度もランサ・から逃れることが出来たったことね。」

「えっ？」

「んっ？」

「あ、」

納得したようすだった凜の最後の言葉に士郎が漏らし、凜が首を傾げ、白兔も声を漏らした。

「え、学校に居たの衛宮君でしょ？ランサ・は目撃者を殺すように仕向けられていたから逃げた衛宮君が止むえずセイバーともう一方のサーヴァントで交戦したんでしょ？」

「いや、一回目は白兔に助けられて、二回目で俺はセイバーを召喚して…え、もう一方？」

奏者、ぴんちじゃないか？

んー、…みたい

内心焦り出した白兔はあの子の選択を間違えたのに後悔しだした。

第二十二話・赤との接触（後書き）

文が短いと言われ二十二と二十三を合体しました。

取りあえずは赤主従との接触し、ようやく聖杯戦争に巻き込まれることになりました。

次回からそろそろ赤セイバーをお披露目（？）になります。

第二十三話・数時間前の話と紅き薔薇。（前書き）

急いで書いたので、とことどころが「あれ、おかしくねエ？」があるかもしれません。

第二十三話・数時間前の話と紅き薔薇。

何やら雲行きがあやしくなってきた場にセイバー念話しかけてき白兔はうん、と苦い答えをした。

どうする、ぴんちなようだが……そろそろ潮時のようだ…隠し事はもう出来ないぞ。

そうだね……これ以上話を濁らせると後々厄介だしなあ……

これ以上は隠せないか、と決心し白兔は湯飲みを置く。

セイバー、私が言うまで待っててね？

うむつ、余はいつでもスタンバイオーケーじゃっ！

「遠坂さん」

「ん？…何かしら？」

「それについては、私から話しましょう。……先に話していた学校での騒動は私がやりました。」

「そのようね、っで？…どうやってアイツから逃れたの？」

「はい、私が士郎がサーヴァントに襲われた際、咄嗟の判断で私が乱入して、二人で離脱したのです。そうだよね士郎？」

「あ、ああ……おかげで間一髪で助かった」

助け舟にほっとした士郎は頷く。

「ちょっと待って、並みの人間がどうやってサーヴァント相手に離脱が出来たの？聖杯戦争を知っているならサーヴァントがどれ程の者か知っているはずよ？」

「ええ、知ってますとも。私みたいな未熟者が魔術だけでサーヴァ

ントに敵うはずではない……」

「じゃ、どうやってランサーから逃げ切ったのかしら……？」

「これです。」

ゴトツと机の上にのせた卵形の球体に凜は眉を潜めた。

「これは？」

「手榴弾」

「はあっ……！？」

「……とは違い、瞬時に発光を発する閃光弾です。一時的に視力を怯ませる目眩ましです。」

「あ、そうなの……？」

「はい、流石のサーヴァントも予想外の展開に怯んだ隙に全力疾走で隠れながら逃げたんです……やはりそう上手く事が捗る訳もなく追い付かれましてね。対応した際、武器がない士郎が武器を取りにいつている間なんとか時間稼ぎを試みましたが……流石に実力が圧倒違いで負けてしまい。」

「俺は白兔が時間稼ぎをしている間に何か武器になるものを探している間に奴が迫ってきた……その際にセイバーが姿を現れたんだ。」

「そのあと、セイバーさんが遠坂さんに反応し、私と士郎が駆けつけた……こんなもんですかね？」

何か質問は？と問うと凜は、色々と聞きたいことがあったがそれを飲み込み、白兔に質問した。

「衛宮さん、貴女がどこでそれを手に入れたのかは聞かないことにして……貴女、よくサーヴァントに太刀打ち出来たわね。しかもその場を逃れたのなんで……出来るのかしら？」

「まさかっ！……学校では相手が怯んだからよかったんですよ。」

「衛宮さん、貴女笑っているけど……サーヴァント相手に今回は運

が良かったからいいものを…もしかしたら死んでいたのかもしれないのよ？」

「……あー、そうですね。死んでいたかもしれませんね。」

一瞬キョトンとしたが、ああ、と間をおきまるで他人事かのように平然として答える白兎に凜は言葉を失う。

それは士郎も同じく口を開こうとしたが白兎は大丈夫ですよ、と笑う。

「そう簡単にはくたばりませんよ。」

やられてたまるか、とグツと胸に手を置く。

「でも流石にサーヴァント相手に生身の身体が何処まで耐えられるかわからなかった、最低でも骨を砕かれる覚悟はしていたのですが、あちらも多少は手加減していたのか骨は無事でした。」

だからご心配なくなんなら見ます？、とニツコリと微笑む彼女に凜は何も言えずに結構よ…と答えた。

「（さて、本題だな…）…それから、先ほどセイバーさんともう一方とかがなんとかと言いましたね。」

「…ええ、アーチャーとセイバーの仲裁をした大剣の赤い服の暗かったからはつきりは分からなかったけどセイバーによく似た子よ」

「セイバーに似た子？…セイバーホントか？」

「はい、赤い大剣に赤いドレス姿でした」

セイバー
剣の騎士が頷くと士郎は凜に本当に俺は知らないと言を振る。

凜は白兎に視線を向ける。

「遠坂、白兔を疑っているのか…?」

「そうね、可能性は高いしね。」

「待ってくれ、白兔は白だ。夜はずっと家に居たし、サーヴァントを召喚したとしても俺が気づかない筈がないっ…それに、白兔には

…」

「士郎」

「え、…」

ジツと見つめつ白兔はフツと笑うと自身の左手の甲を見せ、小さく何かを呟けば甲から浮かび上がる赤い刺青に言葉を失い、凜は警戒した。

「残念だけど、黒なんだわ。コレの事は今日話そうと思っていただけこんなタイミングでごめんね。」

ヒラヒラと手を振る白兔に苦い顔をした兄に困ったように笑う。

「って、ことで大剣の子は私のサーヴァントなんです。あの時は、咄嗟の判断で行かせたんです。」

「へえ…その子、此处に居るの?」

「ええ、私の真横に居ますよ。」

もういいかつ?

駄目っ

うつ——…

唸るセイバーを無視して、凜に向けニコニコ微笑む。

「私のサーヴァントはある目的のために呼んだのです。」

「あら、なんの為かしら…?」

「さあ？遠坂さんには関係のない話なので」

「…………、それより、普通サーヴァントを召喚したなら魔大気中のマナが反応するんだけど、それがなかったのはどうしてかしら？」

「それは、私のサーヴァントは特殊として特殊な召喚をしたからです。」

「特殊ねえ…どうやって召喚したのか教えて欲しいわ」

「ノーコメントで」

「…」

誰が言うかよ、とニコニコと微笑みながら目で言う白兔に凜もあらそう…と言いながらもふざけんなよ、と眼光鋭くする。

「まあいいわ、それより貴女のサーヴァントを見せてもらいましうかしら？」

有無も言わせない発言に少し戸惑いながらも白兔はわかりましたと良い、念話でセイバーに話かけた。

セイバー、お待ち——

待っておったぞっ！ついに皆にお披露目だなっ！！よかろう！！

セイバーが実体化しようとし、はっとした白兔は止めようとしたが既に遅し。

「ま、まっ——」

「皆のもの、刮目せよっ！」

実体化し高らかに発したセイバー、だが啞然とし固まる四人とアチヤーっと頭を抱える白兔。

「むっ？何じゃ余のあまりの美貌に言葉が出ぬのか？」

「なっ……」

「な？」

「なんで下を穿いてないのお——！？」

あ、やっぱりそこに突っ込み入れますか？

白兎は言葉に出さず呟いた。

そりゃ、前透けてるし、半ケツだもんな…

「何か言ったか奏者？」

「いや、なんも…」

「さて、先も話に出たが余が、奏者のサーヴァント セイバーだ、よろしゅうな……其方の話は全部聞かせてもらった。」

「セイバーが二人も…？」

「これは一体どういうことですか…？」

「ふむ、それは余はイレギュラーだからじゃよ」

「え、それって——」

上から目線の発言のセイバーに凜が口を開くがセイバーは「そんなことより、」と言葉を続け割り込めない…

いつの間にか、セイバー自身にことから白兎の魅力について語り出した。

高らかに語るセイバーを尻目に立ち上がる白兎は台所の戸棚から箱を取り出し、カチャカチャと何かを準備している、その間もセイバーはずっと語っている。

やがて、何か手に持って戻ってきた白兎の手には高級そうな鮮やかな色合いのティーセットを机に置き、ティーポットから注がれる紅茶、注がれた紅茶の入ったティーカップをセイバーの前に置き、茶菓手に鮮やかなマカロンを置く。

演説し終えたセイバーは用意されたティーカップを持ち上げ優雅に口に含み、フワリと笑う。

「ふむ……なかなかだ。誉めてつかわそう奏者」

「ありがとうございます、セイバー」

満足気なセイバーに白兎はニツコリと答えた。

「なんでサーヴァントに対して高い茶葉を使っているのよ……！」

「一様、遠坂さんに御出ししているのはお客様用の上等品の玉露なんです……？」

何か文句あるのかあ、あん？、と言葉に出さすとも目で言う白兎にいいえ、とお茶を啜る。

おまけ

「まあ、話しは区切りがついたし取りあえずは…」

立ち上がり台所の乾物入れを漁るとオレンジ色の袋を出した。

「士郎、チ●ンラーメンだけでも食べきな」

「あ、サンキュー」

ズサッ

「遠坂さん？どうしま〜」

「こんな時にラーメン食べてる暇があるかあ！」

「けど、士郎昼からなんも食べてないんですよ？流石にお腹がすきますよ。」

「卵まだあるかー？」

「あるよー」

「衛宮くんもなんで突っ込まないのよっ！」

「だって腹減ったし…」

「遠坂さんも食べます？まだありますけど？」

「……いないわ」

はあつとため息をつき茶菓子の煎餅に手をのばしたが、器は空っぽで煎餅は見当たらない。

代わりに剣の騎士の前には破かれた小袋が数個…

優雅に紅茶を楽しむセイバーはティーセットの横に置かれた一口サ

イズのマカロンを満足気に食す。

「うむ、美味じゃ」

第二十三話・数時間前の話と紅き薔薇。（後書き）

ふう…、書きたかったところが書いて満足してます。
ようやく、赤セイバーが現れました！！
そして、それを見た士朗ら絶対に硬直してしまう
とくに剣の人と弓の人が…！

次回「教会に向かう三組の主従」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3366o/>

Fate/stay night・Undersea Tsukinowa

2012年1月15日01時53分発行